

『真州長蘆了禪師劫外錄抄』の研究（下）

禅籍抄物研究会
代表 石川 力山

はじめに

太田瑞岩寺・桐生鳳仙寺等の開山で、龍ヶ崎金童寺七世貫之梵鶴（一五〇五～一五九〇）による、真歇清了（一〇八八～一五一）の語録の抄である『劫外錄抄』（以下「梵鶴抄」）について、研究会ゼミによる輪読を開始してすでに三年目に入った。この間、二回にわたり、輪読参加者の共同作業になる『梵鶴抄』本文の翻刻、および『劫外錄』本文について、寛永刊本（寛本）・面山本（面本）・万安抄本（万本）・大乘開山徹通和尚註本（大本）の異本四本による異本校合を行い、さらに『劫外錄』や『梵鶴抄』に関する基本的な考察を行つたものと、その間に行つた『梵鶴抄』原本の所蔵者岸沢文庫の資料調査の中間報告も併せて掲載してきた。かくして『梵鶴抄』の三分の二の翻刻が成り、本号掲載の残り三分の一と合わせて、翻刻の作業は完了することになる。

今回は、輪読参加者の中の、博士課程一年道津綾乃氏による「真歇清了伝について」と、筆者の「『劫外錄大乘開山徹通和尚之註』について」と題する各稿を収録した。

いずれこれまでの三回掲載文の翻刻部分、ならびにそれぞれの稿を改めて一本にまとめたいと念願しているが、研究篇でまだ論じ残している部分も多い。たとえば、『梵鶴抄』の抄者貫之梵鶴の伝記に関する詳しい考証もまだ不十分であり、なによりも『梵鶴抄』それ自体の思想的特質についてはほとんど手が付けられていない。さらにもとの抄のもとになつた『劫外錄』そのものの宋代曹洞宗旨としての思想⁽²⁾と、抄に見られる日本中世曹洞宗における宗旨理解との比較論的な特質、語録抄の歴史における『梵鶴抄』の位置付け、年代的に『劫外錄』と『梵鶴抄』の両書の中間に位置し、梵鶴も抄でしばしば引用する、『大乘開山徹通和尚之註』の宗旨の捉え方との微妙な差異や落差など、多くの問題・課題を残したま

まになつてゐる。こうした多岐にわたる課題究明には、やはり共同研究という方法が有効であろうと考えられるので、今後とも中国・日本の禅宗史や国語学等の衆知を結集して取り組んでいくことが必要であろう。

なお、本年度の研究会参加者は、曹洞宗宗学研究所主任熊本英人・同研究所員尾崎正善・同飯塚大展・駒沢大学大学院博士課程道津綾乃・同修士課程石附正賢の各氏、および都留文科大学教授樋渡登・駒沢女子短期大学助教授安藤嘉則の両先生にも、適宜御出席いただき御助言を頂戴している。各位に記して謝意を表しておきたい。

また特に、抄物研究の趣旨に御賛同賜り、岸沢文庫の関係典籍の閲覧を御快諾され、資料調査の要請に快く応じていたいだいた、焼津市旭伝院住職田中慶道老師に対し、深甚の謝意を表したい。

註

(1) 梵鶴の伝記については、金田弘「天真派貫之梵鶴の抄」(『浅野信博士古稀記念、国語学論集』所収、一九七七年十月、桜楓社刊) がこれまでのところ唯一のものである。

(2) 石井修道『宋代禅宗史の研究』(一九八七年十月、大東出版社刊) 第三章「第三節芙蓉道楷の三賢孫」参照。

(以上文責、石川 力山)

真歇清了伝について—はじめに—

真歇清了の生涯を述べるうえでの根本資料は、『明州天童景德禪寺宏智覺禪師語錄』に収められた、「崇先真歇了禪師塔銘」(以下、「塔銘」)である。「塔銘」は、『劫外錄』自体には付されていなかつたが、面山瑞方(一六八三～一七六九)によつて編集された同書に付加されることになつた。本論文では、石井修道氏『宋代禅宗史の研究』資料⁽¹⁾一、及び同氏「慧照慶預と真歇清了と宏智正覺と」に所収される塔銘を、主に参照することを始めに記しておく。

「塔銘」は、實に興味深い記事で満ちている。そのおもしろさは、「禪者真歇」を捉える方向で同書を読み進めても表れてはこない。思想家としての彼を知ろうとするならば、それこそ『劫外錄』等を読むべきである。では、筆者が興味を引かれた「塔銘」の真歇は、どんな顔をしているのか。それは、政財界に強力なコネクションを持つやり手としての真歇なのである。

筆者は、真歇清了の禪を「默照邪禪」と痛烈に批判したとされる大慧宗杲(一〇八九～一一六三)の『大慧普覺禪師年譜』⁽³⁾を演習で読んだことがあるが、同書に見える、大慧と政界との堅固な結びつきは、宗教人というイメージにほど遠い。あまりに政治家に近付き過ぎた大慧への見返りは、「僧籍剥奪」

と「遠流」であった。このような大慧の波瀾万丈な人生は、ただの不運ではなく、彼の“負けん気の強さ”より端を発する、いわば「身から出たサビ」でもあった。大慧の激しさを、いくつかの真歇批判の中から一つを例にしてみてみたい。

一、修行時代

只だ真歇の如きは尋常、学者の、多く目前の鑑観を認めて、知見を求める解会を覓め、歇時有ること無きを見て、已むを得ず、人をして劫外に承当せしむ。（中略）黒山下鬼窟裏に動せず、坐得して骨脛に胝を生ず。口裏に水滻々地、肚裏依前として黒漫々地なり。驢年に夢にも見んや。

『大慧普覺禪師普說』（大正藏四七 八六四a～b）

この文章で、大慧の激しさとともに、真歇がどう接化し、修行していたかも看取することができるということは、石井氏の明らかにしている通りである。真歇清了は、「劫外」を説き、尻にタコができるほど坐ることを修行の手段とした。大慧の言う「默照邪禪」の姿である。それにしても、大慧の口調に激しさを感じない人はいないだろう。当然ながら、大慧にとって真歇の思想は、敵対視すべきであったからこその大慧である。思想については、筆者は浅学であるので、記述を控えたい。しかし、批判は、全く異なった何かに対し行われるのではなく、似ているからこそ、違いを出すために、後続者が先人に対して起こす行為であると、筆者は認識している。筆者は、この類似部分が、思想のみならず、禅僧

としての環境・境遇にも及んでいたのではないかと考えるのである。前述の“負けん気の強さ”とは、この「環境」を考えた上で出てくる言葉なのである。

「塔銘」は、真歇の人物評の後から、伝記を綴っている。師、諱は清了、道号は真歇。姓は雍、左綿安昌の人なり。

宇井伯寿氏⁽⁴⁾の指摘によれば、「左綿安昌」は四川省、石井氏⁽⁵⁾は『補続高僧伝』より、蜀の文字を検索している。つまり、真歇は、蜀人なのである。彼は元祐三年（一〇八八）に出生しているが、この当時、政治を動かし、また混乱させていったのは、洛陽出身者の集団である洛党と、蜀出身の蜀党の二大勢力であった。蜀は、文化人や宗教者を多く輩出している、文化水準の高い国だったのである。そんな周囲の環境に、真歇の禅僧への道を妨げるものは何もなかつたらしい。十一才で出家し、十八才（もしくは十九才）で得度、成都の大慈寺で円覚經・金剛經・起信論等の講義を聞く。やがて蜀を出て遊行生活をはじめ、諸寺を転々とする。真歇の気分としては、丹霞山も、その諸寺の一つだったろう。丹霞子淳（一〇六四～一二一七）に接見する寸前まではである。

真歇にとっての決定打は、「作麼生是空劫已前自己？」という、丹霞の質問と、一発の平手打ち（？）だったと、『劫外

録』は言つてゐる。これによつて真歇は、「何か」を悟つたのである。「何か」が何であるのか、筆者には察することができないが、禪僧の間で設定される、最高の地点に到達したと考えられたのだろうと、詮索する。これが、政和二年（一一二）以前、真歇二十四才頃のことである。

丹霞子淳に出会つたことを第一の転機とするならば、長蘆山を訪れた政和三年（一一三）は第二の転機といえるだらう。滞在すること、およそ十五年。ここで真歇は、①寺院經營の知識、もしくはその知識を持つブレーン、そして②經營に見合つた財源、つまりパトロンを確保したのではないかと仮説するのである。

この仮説の①の根拠は、

時に、祖照禪師、儀真長蘆に住す。（中略）師、其の中に投ず。

英俊相親しく述べること屢々たり。殆ど半ばに延いて侍者とす。年を経て罷め、転物寮を以て之を待し、挙して分座入室せしむ。

の傍線部にある。転物寮は、筆者の知る限りの資料・辞書等を探したが、どこにも見当たらない。ただ、「転物」は、物を売買することであるから、転物寮は、寺の事務、中でも金銭に関わる部署ではなかつたかと思われるのである。②の根拠は、

宣和三年、祖照病む。復た命じて師を第一坐とす。病甚だしく、

退院す。四年秋七月、經制使陳公、師を請うて補處せしむ。

の傍線部にある。經制使とは、宣和年間に始められた、經制錢制度を司る役人である。同制度は、日に日に進む經濟破綻と、外國の脅威による軍備拡張のための資金確保をその原因とする、増税政策の一である。同制度の総責任者が經制使であり、宣和二年以降、これに当たつたのが、隨軍轉運使陳亨伯⁽⁶⁾である。經制錢以前の經濟政策として行われていたもの一つに、方田均稅法がある。これは宣和二年十二月に廃止される。そのときの詔は次のようにだつた。

方田均稅法では賄賂が公然と行われて、豪右形勢の家は租稅を減免され、その租稅が下戸に移るため、民戸は困窮して他郷に流亡し、租稅の額も減少したので、不均の所はみな、方田均稅法を行う前の稅額によつて納めさせる。⁽⁷⁾

これによつて収入が減つてしまつたために、朝廷は塩や酒等に經制錢等の間稅をかけたり、兵糧の確保のために均羅法を施行したのであつた。つまり、「塔銘」の陳公は、經濟再建のために白羽の矢を立てられた、エリート官僚だつたのである。当然、裕福だつたに相違ない。

真歇は、長蘆寺の重役に指名される度に逃げ腰になつていった。宇井氏の指摘⁽⁸⁾によれば、『叢林盛事』卷下に、祖照道和禪師の病によつて指名をうけた第一座の位を、「私は丹霞の法を嗣いでいる」といつて拒み、祖照を怒らせてゐる様子が

書かれているという。そんな真歇が、陳公に後押しされるや、翌年には開堂説法をするという、変身を遂げている。この変わり身を、思想面を原因として論ずることもできるようし、単なる心境の変化と言ってしまうこともできるだろうが、筆者は、①②の仮説より、寺院經營に、それなりの準備が整つたからだと考えるのである。

二、寺院復興の達人へ

さて、宣和五年（一一二三）夏の長蘆寺開堂に際して、修行僧は千七百人という、真歇教団は大集団であった。そしてほどなく、最初の試練が訪れたのである。

六月、江風、潮に駕り、田に漫ちて殆ど穫ること無し。

つまり、水害で収穫が難しくなってしまったのである。椎名宏雄氏の指摘によれば、「宋元代の寺院の多くは広大な寺田を持ち、地主として多大の収入をえて寺院經濟の相当部分を支えているが、長蘆寺の場合も例外ではなかつた」とある。しかし、その寺田も収穫の見込みが薄い。が、真歇はこう言つた。

師、陞堂して衆に告ぐ、安坐して憂うこと勿かれと。

そして、とつた手段は「乞食」だった。しかし、周辺の田畠は収穫がないとすれば、いったい誰に乞食したのだろうか。真歇が帰ってきたのは五ヶ月後の宣和六年二月だった。この

様子は「塔銘」にこうある。

六年二月、還るを告ぐるに鼓を撻つ。所得を出すに、供、須らく羨有るべし。

つまり、収入は莫大だったのだ。この三年ほど前には、宋江の乱・方臘の乱が相次いで起こっている。特に方臘の乱においては、両浙東西・江東路の六州五十二県が兵火を受け、二百万以上の人々が被害にあった。朝廷は、この年これらの地方の税金等を免除した。前述の経制錢のような経済政策は、この乱後に施行されたわけである。二つの乱は、單に、朝廷に対する個人の起こしたクーデターとするには、少し短絡的なようだ。これららの反乱には多くの農民が参加している。農民の朝廷への不満は、これ以上ないものに達していたと言える。つまり、反乱以前、農民は、我慢できないほどの搾取を余儀なくされていたのである。そして追い打ちをかけるような水害である。話を真歇に戻そう。真歇が乞食した相手は、誰か。疲弊しきつた農民からだつたのだろうか。筆者は、資産のある人々から供養を受けたと考えた方が自然だと思うのである。資産家として思いつくのは、やはり士大夫のほかないのであるが、真実はどうなのだろうか。

建炎二年（一一二八）、長蘆寺を退院した真歇は、補怛洛迦山へ不肯去觀音を詣で、そのまま住み着いた。

八月、錢塘を絶りて、明の梅岑に如きて、觀音大士を礼す。海

山七百余家、一たび教音を聞きて、俱に漁業を棄て、計るに日に千万億の命を活かす。

つまり、補怛洛迦山の僧侶の数は一気に増え、真歇はその手腕で彼らを養うことになるのである。石井氏の論文⁽⁹⁾では、

『補怛洛迦山志』に、それまで律寺であったこの寺を、真歇が禅寺に改めたので、真歇を禅寺の一世としていることが明らかにされている。寺院再興とは言わないかも知れないが、真歇清了によつて、補怛洛迦山の規模が拡大したことは事実である。

山を出た真歇は、またも遊行生活を始めるのであるが、長蘆山での成果、補怛洛迦山の再興による名声は、彼を放つておかなかつた。建炎五年（一一三〇）五月、天台国清寺から住持の誘いがかかつた。しかし、真歇は三度請われて、三度断るという「三顧の礼」をも固辞してしまつ。国清寺が天台教学の中心だったからなのだろうか。筆者は、この事柄に対しても、「真歇の能力」を勘織つてしまふのだ。つまり、寺院復興の才能である。この二年前、国清寺は重修、寺院の拡張工事が行われている。復興の必要性は全く無いのである。

真歇の遊行は一年足らずであつた。雪峰山に請われた彼は、建炎四年（一一三〇）の十一月に入院する。雲水はたちまち長蘆山のときの数を越え、檀信徒は、われさきに布施し、寺の財政は、少しづつではあらうが、確実に好転していく

た。真歇は雪峰山に七年もしくは六年住持した。この間、雪峰山の由来である雪峰義存・閻王王審知のころの繁栄を再現しようと努力していたことは、「塔銘」より伺うことができるのである。⁽¹⁰⁾

紹興五年（一一三五）、雪峰の東庵に退居したとき、真歇清了は四十九才だつた。当時の中国で、人生何年と考えられたかは知らないが、恐らく、真歇もそろそろと思っていたかもしれない。しかし、真歇を取り巻く環境は、そうさせてくれなかつた。真歇の名声が、より大きくなつたことで、少なくとも二つの効果が現れた。一つは、大慧宗杲の真歇批判が紹興四年（一一三四）三月から、雪峰山上において始まつたこと、もう一つは、阿育王山再興という仕事の依頼である。

三、復興二大事業

紹興六年（一一三六）十月に、真歇は阿育王山広利寺（五山第五位）へ入寺した。それまでの阿育王山の有り様は、「塔銘」によれば、こうだつた。

寺の曠敗、未だ料理するに易からず。斎の鼓、伐たず、昼の突、黔ます。逋、幾んど二十万を負う。人、悉く憂いを為す。

餓死寸前の借金地獄、まさにこういつた表現がぴつたりなほどの凋落ぶりである。しかし、わずか数ヶ月のうちに、真歇は滞納していた税金の八割から九割を償つてしまつた。この

ころの社会の情勢は、遷都して成った南宋政府が、金との和解工作を画策し始めたころだった。戦争の終息は、民衆の生産意欲をうながし、土地開発、技術開発が行われるきっかけになる。それとともに、貨幣経済がいよいよ浸透し始めたのであった。活気づいた世の中が、真歇の借金返済の不可能を、可能にしたのかもしれない。そして、

井邑林樊、師の来たるを聞くを喜び、遠親近隣、老を扶け幼を携て、肩踵相い摩り、舳艤相い銜む。

とあるように、真歇清了が、救世主のように考えられていた様子が描かれていることも無視できない。しかし、続く「通の十が八、九を償う。」という文章が、筆者にはどうも引っかかる。どうしても上記の文にいう人々、つまり生産階級層だけだとは思えない。彼らは真歇を慕つて来るが、実は、経済援助の大方は、先ほどから述べている、強力な援助者に依っているのではないかと考えるのである。

こうして立て直した阿育王山を、真歇は一年足らずで離れ、蔣山に住す。

七年、建康に駐驛す。師に詔（面山本『劫外録』に詔）して、師をして蔣山に任せしむ。

蔵山は、十刹第三の蔣山太平興国寺である。筆者は上記の文の「詔」は面山本「詔」の方が文意に適うと考える。つまり、高宗（一一〇七～一八七）の詔勅により蔣山をまかされ

たのである。しかし、蔣山住持は一年で、すぐさま温州（浙江省）へ行くことを詔される。紹興八年（一一三八）、真歇五十一才の時である。

八年、温の龍翔・興慶二院合額の禅居、師に詔して之を主らしむ。四月、入院し、陞堂小参して、来衆を安集す。

合併されたこの寺院は、江心山龍翔寺となり、十刹の第六となる。ここに到るまでの真歇清了の事業を、「塔銘」をもとに探つてみる。

- ①東西の両址に堤を築く。
- ②南北に、三門・大殿・法堂・方丈を建てる。
- ③金・穀物・竹木を乞食して得る。
- ④双塔を建てる。
- ⑤寺田、千畝を賜う。

こうして、「法・食厭満して、乃ち仏祖の職事専らにす」の状態まで向上させたのである。全ての事業において必要だったのは、言い方は悪いが「コネと金」である。そして考えられたのは、強力な援助者で、しかも皇帝に近いところにあつた人物である。ここで、注意するべきことがある。真歇が、いわば地固めをコツコツやっていた時期に、思想界に華々しく登場した人物のことだ。大慧宗杲、彼が五山第一位の徑山に住したのは、紹興七年（一一三七）から四年間である。大慧は紹興十一年（一一四一）に神臂弓事件を起こし、衡州（湖南省）

そして梅州（広東省）へと流される。事件の発端は、大慧の作った偈が、皇帝に対する言葉遣いとしてふさわしくなかつたことに依るようだが、十五年もの長い間、都に帰つて来ることができなかつたのは、尋常ではない。この長期の流刑は、

大慧と時の政治家との親密な交際が原因であり、その政治家の失脚が、大慧の運命を狂わせてしまつたのであつた。話を元に戻すと、真歇の援助者は、龍翔寺住持のときには、大慧のそれより下位であり、同事件以降、その人に取つて替わつた人物と考えられるのである。

大慧が衡州で不遇な生活を強いられた四年目に、真歇清了に径山住持の詔が下される。真歇五十八才の春だつた。『大慧普覺禪師年譜』をみると、大慧が径山に入った翌年の大衆の数は千人に到つたとある。しかし、真歇の場合、（『塔銘』によれば）どうも入院した当時で、僧千人を超えていたと思われるるのである。この比較だけでは、「真歇は大慧より人気があつた」としか書けないのであるが、しかし、何故人気が出たのかをも考えてみれば、次のような推測が出来る。真歇住持のときは、大慧のときの「憧憧として往来し、其の門、市の如し」といった派手さではなく、「常住にして素薄なり。行丐するに供を以つてす。」という質素さがうけたのではないかと。折しも交戦中の金との和議が成立し、社会・経済が動き始めたころである。「塔銘」に今までのようない金錢の後

押しを伺うことができる記事がないのは、「コネと金」が身を助ける時期が終わり、静かな修行生活を送ることが、人気を高める時代がやつてきたのかと考えてしまうのである。

四、最晩年

紹興二十年（一一五〇）、真歇六十三才の冬にひいた風邪は、彼を氣弱にさせた。「長蘆に帰りたい。」前に見てきたように、真歇の生まれ故郷は蜀の国だが、長蘆は第二のふるさとだつたのだろう。だが、帰れなかつた。病氣の彼に下つた勅命は、崇先顯孝禪院の住持だつた。翌年の夏の暑さの中での旅は、体に酷く応えたようだ。九月十五日の慈寧太后訪問に、病をおして開堂する。この無理がたたつて、十二日後に医者に見せることとなる。しかし努力の甲斐なく、十月一日、とうとう示寂するのである。

真歇の遷化の様子は、とても静かである。首座を呼び、一言「吾、今行かん」と言うと、結跏趺坐して逝く。話は逸れるが、ここでまた、筆者の悪い癖を出してみる。大慧は、どんな示寂の様子だったのか、比べてみたいのである。大慧は、真歇の亡くなつた十二年後の隆興元年（一一六三）に逝く。まず、七月十四日夜、隕石が寝室の後ろに音を立てて降つてきたのを聞いて、「吾将に行かんとす。」と言つたという。八月九日に意識不明になつている大慧を弟子が見つけて、寝室

の周りをぐるっと取り囲んでしまった。おそらく、悲しみに泣き叫んでいたりしたのだろう。すると、大慧はやおら目を開けて、「明日行こう」と言つたというのである。意識を取り戻した大慧は、世話になつた丞相達や友人に、手紙や形見分けを始めた。これを見ていた弟子の中には、遺偈を請う者もいた。大慧は、その者達に「生も也た只だ恁麼なるのみ、死も也た只だ恁麼なるのみ。偈有ると偈無しと、是れ甚麼の熱大なる。」こう言つて、床に就き、そのまま逝つたのである。

ある。一時は「ある時、一時期」である。もしかしたら、長蘆開堂から徑山住持以前までを指しているのではないかと考えるのは、行き過ぎだろうか。それから「士大夫」は単数なのか複数なのか、何故名前が出せないのか、出さなかつたのか疑問なのである。前出の經制使陳公のことなのだろうか。この一文には想像をたくましくさせる要素が多分にあるのである。

おわりに

『大慧年譜』は、ここまで書くと、延々と弟子の名を列記している。その宗風盛んなりしことを誇示するためであろう。しかし、残念なことに、真歇清了の「塔銘」には、弟子として出てくる名前は、ほんの少しである。しかも、真歇の経済援助のできそうな士大夫らしき名は、皆無である。宇井氏の指摘している弟子の中にも、役名の付された名前を見出しえない。ただ「塔銘」に、こんな一文がある。

一時、賢士大夫、之に遊ぶことを樂う。諸方の名徳尊宿、其の盛んなるに侔しくすること難し。

併は「ひとしい、ひとしくする」の意味があり、その主語から考えると、真歇教団の盛んなさまは、あらゆる地方の立派な僧侶も及ばなかつたと、解釈できるようと思う。また、何よりも筆者が気にかかるところは、まず「一時」の言い方で

筆者は考察するのである。

筆者は真歇の思想面に疎いため、「禪者真歇」の伝記というよりはむしろ、激動の時代を、禪僧という職業を営みとする人物としての真歇を追うことになってしまった。「禪者真歇」を知らうとするならば、『劫外錄』他の著作と、多くの先行論文を参照するべきだと考える。しかし、それ以外の面も、真歇その人なのである。筆者の力及ばず、今論文は仮定推論の域を出ないが、「塔銘」の再検討、当時の叢論等の検証と、社会背景と思想の関連を考察する必要性を提案して、終わろうと思う。

註

- (1) 石井修道氏『宋代禪宗史の研究』(昭和六十二年、大東出版社) 四九八頁～五〇八頁。
- (2) 同論文は、『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三十六号(昭和五十三年三月)に掲載されている。
- (3) 寛永二十年、沢田庄左右衛門刊行の、駒澤大学国書館所蔵本。参考として、『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三十七・三十八・四十号(昭和五十四・五十五・五十七年)の石井氏論文「大慧普覺禪師年譜の研究」(上)(中)(下)を参照した。
- (4) 宇井伯寿氏『第三禪宗史研究』(一九四三年、岩波書店) 四四五頁参照。
- (5) 石井氏前掲論文、一四九頁参照。
- (6) 『東洋歴史大辞典』(昭和十二年、平凡社)「ケイセイセン」

の項に陳亨伯及び、経制錢等のくわしい説明がなされている。

(7) 周藤吉之・中嶋敏共著『中国の歴史 5』五代・宋(昭和四十九年、講談社)二六〇頁参照。以下、宋代の社会及び經濟情勢に関する記事は、多く同書を参照している。

(8) 前掲書、四四六～四四七頁参照。

(9) 前掲論文、一五一～一五二頁参照。

(10) 「塔銘」に、「閩中仏刹、自古禪居、深林遠壑、樓觀相望。主盟之人、悉舉江湖。有道尊宿、一洗故習。」の文がある。

(11) 崇先顯孝禪院は、慈寧太后、つまり顯仁皇太后(一〇八〇～一一五九)の建立である。徽宗の后で、高宗の母である顯仁皇太后は、靖康の変(一一二六～二七)で徽宗とともに金に捕らえられた韋皇后と同一人物である。徽宗は紹興五年(一一三五)、捕虜のまま没するが、彼女は同十二年(一一四二)、徽宗・鄭后・邢后的梓宮(棺)とともに歸つてくるのである。

(以上文責、博士課程一年 道津綾乃)

『大乘開山徹通和尚註』について

宋代曹洞宗を代表する真歇清了(一〇八八～一一五一)の前半生の語録『劫外錄』に対し、すでに鎌倉末期において、永平寺道元より三代目の法孫に当たる大乗寺開山徹通義介(一二二九～一二三〇九)に、弟子の瑩山紹璉のためになした「著語」や「解釈」からなる「註」があつたという伝承については(以下『大乘註』)、すでに岸沢惟安師の指摘がある。⁽¹⁾それ

は、師の所蔵する『劫外錄』の『梵鶴抄』の諸処に、「大乗開山ハ、……ト被仰タゾ」あるいは「大乘云」として、主に徹通の「著語」「代語」「下語」ともいるべきものが多数引用されていることを根拠としたものであるが、さらに同じく岸沢文庫に所蔵される、面山が明和四年（一七六七）に校訂刊行した『劫外錄』の行間や欄外には、この徹通の註が全文にわたりて引用されており（以下『面山本所引大乘註』）、あるいはテキストとしても所持されていた可能性もある。

この『大乘註』の存在については、愛知県豊川市西明寺所蔵の『劫外錄大乘開山徹通和尚之註』⁽²⁾が、単独のテキストとしては今日知られる唯一の伝本であるが、この西明寺本には見られない註が『面山本所引大乘註』の（92）（93）（94）（95）の各段には存するといった大きな違いや（今回翻刻の『梵鶴抄』の該当個所には、『面山本所引大乘註』から引用しておいた）、明らかな文言の異同等もあり、この意味からも『面山本所引大乘註』を『大乘註』の一異本として位置付けることは可能と思われる。

ただし、岸沢文庫所蔵面山本『劫外錄』の序文の欄外には、『面山本所引大乘註』の存在に関する記述として、

朱書及墨書加朱圈着語、大乘開山徹通和尚為瑾首座註也。一本者、指享保四亥年天橋山周徳精舎冬安居龍光求焉之本。此本蔵在但州養父郡伊佐村大江養泉寺室中焉。

という朱書きの書き込みがあり、行間に書写された『大乘註』の外に、岸沢師はこの『大乘開山徹通和尚為瑾首座註』というテキストも実見し、全体にわたり「一本云」と断り書きして欄外や行間に引用している。そして、別紙の岸沢師のメモによれば、

大乘開山、師乃云、抑眼争芳混秀ノ下ニ、

ソノ他ハ、大乘云、

大乘開山徹通和尚為瑾首座註也とあり、

享保四亥年天橋山周徳精舎冬安居龍光求焉之本大乘著語あり、みて相違あり、明和丁亥（一七六七）孟春較正の真州長芦了禪師劫外錄、拙僧藏本にも大乘著語あり。

とあり、これらのメモを合わせ判断するなら、岸沢師入手の面山本『劫外錄』には、もともと一本の『大乘註』が書写されていた（A本）。そして、たとえば序文の中の「一葦江」という語に対する註としては、「○説法處也、又指長長蘆也」という語とは別に、重ねて「又指長芦也」という註も引用されており、これは恐らくA本とは別行の『大乘註』の引用、もしくは異本校合の形跡と認められ、この時用いた校合用のテキストをB本と呼んでおく。

さらに、序文欄外朱書に見られる『大乘開山徹通和尚為瑾首座註』とは、享保四年（一七一九）に天橋山周徳寺（京都府中郡大宮町周枳）で龍光により書写されたテキストで、これ

が丹州伊佐村大字大江（兵庫県養父郡八鹿町大江）養泉寺の室中に叢蔵されており、岸沢師はこれを実際に閲覧されて、面山本の行間や欄外に、朱書もしくは墨書で「一本云」等として引用されたものと思われる（C本）。このほかに、『面山本所引大乗註』には多くの朱墨による「見セ消チ」が見られるが、これはC本による異本校合の様子を伝える痕跡と思われる。

ともかくもこの『面山本所引大乗註』と、豊川市西明寺所蔵の『劫外錄大乘開山徹通之註』を比較して見るなら、徹通義介のものとして伝えられて来た同系統の註であることが知られる同時に、西明寺本が天下の孤本ではなかつたことが確認された。そしてこれらの内、岸沢師が実際に見られて異本校合をされたC本、すなわち養泉寺本『大乘開山徹通和尚為璉首座註』は、あるいは岸沢文庫に所蔵されているかと推測されたが、今の所、架蔵本中には見当たらない。

最後に、養泉寺本と想定されるテキストが伝える『為璉首座註』という書名については、西明寺本の表題には、『劫外錄大乘開山徹通和尚之註璉首座書之』とあり、細字の記載によれば、瑩山が書写したことを伝えており、この註の成立事情を反映しているとも見られる。ただし、この註を果たして徹通義介のものとしてそのまま認められるかどうかについては、書誌的にも多くの問題を残したままである。

註

いざれにしても『劫外錄』に対する『大乘註』には、系統の異なる複数の伝本が存したことを物語つており、『梵鶴抄』が部分的に伝える「大乘云」として引用されたものもその一本であつたことになる。

(1) 岸沢惟安『信心銘葛藤集』（一九四七年九、要書房刊）

二頁。

(2) 西明寺本『劫外錄大乘註』について、最初にその所在を指摘したのは、「西明寺」（『禪宗地方史調査会年報』第四集、一九八八年三月）であり、内容の紹介については、石川力山「洞門抄物の発生とその性格」（『財團法人松ヶ岡文庫研究年報』第二号、一九八八年二月）、及び前稿「『真州長蘆了禪師劫外錄抄』の研究（上）」（『駒澤大學佛教學部論集』二十五号、一九九四年十月）参照。

『大乘開山徹通和尚為璉首座註』の復元

以上、『面山本所引大乗註』には、A・B・C三本の『大乗註』が含まれていることが確認できたが、A本とB本については、これを厳密に区別することは不可能と思われる。したがつて、面山本の行間に引用されたA・B本を一本としてこれを基本にし、さらに岸沢師が「一本云」として朱書・墨

書された養泉寺本(C本)の二本をここに再現してみたい。その際、以下の基準にしたがつた。

1、『劫外録』本文の引用は、岸沢師によつて註の該当部分として面山本に打たれた朱点の部分にとどめた。したがつて原文は面山本である。

2、『面山本所引大乗註』の内、『劫外録』の行間に引用されたA・B本『大乗註』は、△▽として示した。

3、「一本云、云々」等とあつて、養泉寺(C本)の引用と、及び校合の結果と見られる部分については、「」内に示した。また△▽内に引用したA・B本中で、C本との校合の結果の見せ消ち部分については、四角□で囲みこれを区別した。

4、『大乗註』とは別に岸沢師がメモした注記についても、「」内に引用しておいた。

5、序文以外は、全体に通し番号を付したが、これは『梵鶴抄』翻刻の際の通し番号に従つたものである。

(1) 火焰裏轉大法輪△難向用處也。又「△」功也。△疑著△不犯通之句「也」。故云「野花香滿路△此僧作家也」「トホムル也。」△柳眼爭芳、風煙混秀△大似春意有「一作在」景也。△未露處△「不萌ノ時ト」一般也。偏正一如也。△長蘆△處「之」名也。又寺号也。△芙蓉△山名也。楷視ヲ指△丹霞△山名也。子淳禪師。△鉢盂峯△長芦十境之一也。△一葦江邊△說法處也。又指長蘆也。△又指長芦也△雲行水止△往來之衲僧也。△千七百人△衆數也。△窅然空然△洞然明白之處也。△鳥了烏包△功△「深目也、又深遠之貌。」温伯雪子△孔子友也。與孔子路次ニテ行逢テ目擊之間ニ互ニ知育セシ人也。△淨名居士△維摩之事也。△抱美玉於空山、混銀河之秋月△此二句、功之賓主「相合」也。△視之不見△見聞不及也。△言之莫及△言思不到也。△堂上之簾深△那辺様子也。△戶外之履滿△今時之作用也。△萬金良藥△一段之事也。又人々具足物也。△湔腸易骨△透頂透底句也。△得未嘗病△伊本不生不滅也。△如雷雨△出世辺事之要也。△天清物春雨已無用△今時一色也。△木鷦鷯霜、石虎嘯雲△自己一色也。△鳥鳴山幽、蟬噪林寂△那時一色也。△望角知牛、聞嘶知馬△舉一明三△手段也。△又諸方衲僧行履也。△其庶幾歷其藩乎△師之法語△不尋常也。△中橋居士△真歇之法子也。△吳敏△居士△諱也。

〔大乘開山徹通和尚為瑾首座註〕

眞州長蘆了禪師劫外録序

(欄外) 朱書及墨書加朱圈着語、大乘開山徹通和尚為瑾首座也。一本者指享保四亥年天橋山周德精舍冬安居龍光求焉之。本此本蔵在但州養父郡伊佐村大字大江養泉寺室中焉。

萬機休罷處△千聖不傳處也。位之極也。妙玄無私句也。万機休罷△又△有絕學無為之趣也。△一本、千聖不傳處、極位也。又有絕無為趣也。△

(2)如△經△蠱毒之鄉△水也不△得△霑△他一滴△透大火聚之功△至位時節也。「或人代云、死中得活、海中魚不染潮也。」△及盡始通身△合大道處也。△撲不破△刀斧斫不開也。△不假舌頭說△無情說法也。△深密密處△向上也。△明歷歷時△色躰也。△金屑雖△覺△落△眼成△翳△悟△モ△也應吐却也。△

(3)百艸頭上罷△郤平生△用之行履也。△不△作△面目△今時尽却處也。△「一本、盡却今時處。」泥牛觸破嶺頭雲△一句「△」到位也。不住白雲功也。△卓錐△香巖語△把△定乾坤△位深密處也。△融通造化△色一片事也。△打破画餅△百雜碎處也。△雲散水流去、寂然天地空△向去也。

〔色功共△忘△スル△也。〕古德代云、轉功忘去也。△(4)混沌△陰陽未分也。△不借借△シヤク、カル、シヤ、カス、カリモセズ、カリモセヌナリ。△

(5)妙在△一溫前△深潭波未起也。△木雞啼断海雲昏△向去句

也。不可見向去也。△石虎嘯開山色秀△却来句也。不可見却来也。△青松生△古韻△轉位就功也。△白髮咲△寒巖△轉功就位也。再甦出自來今時也。△

(6)白雲△至自己也。△玉鳳△青原堅拂子、投子青頌一句。△秋露△了目前也。△妙盡不△當△今、虛明不△出△戶△向上也。△不△傳△千聖口△莫向萬機求△向上事也。△

(7)暗裏抽△橫骨△天童語、見請益第十九。△(欄外)「林間錄上四十七葉、夾山云、明中抽△橫骨、暗中坐△舌頭△云。」彌天句已彰△不出中「世中」出世「也」「迈」。「(一本)不出世中出世也。」△無△紋彩△出世「之」中不出世也。△莫行△玄處路△切忌住在白雲。△功盡合△平常△合那人時也。平常「住」位也。「是付位也。」△

(8)學不△停△午△夜半正明也。△「(欄外)夜半謂△之正位、轉△此位△却△來△偏△位△故云△正△明△終日雖△居△偏△位△不△離△正△位△故云△天△曉△不△露△意△不△立△玄△天△曉△不△露△不△墮△混△融△機△喫△茶△喫△飯△有△軌△則△也△「一本、喫△粥△喫△飯△是△有△氣△息△」金針密處△位△中△消△息△也△玉線通時△喚△得△歸△來△处△ナリ△「一本、喚△得△却△來△处△也△」雲蘿秀處△青△陰△合△岩△樹△高△時△翠△鎖△深△教△吾△我△如何△說△所以△道△巧△拙△不△到△也△」

(9) 莉山△位也。▽ 片雪△功也。▽ 石女夜登△機△轉功就位也。▽ 歸△根風墮△葉△色躰泯也。▽ 照盡月潭空△通身合大道也。▽

(10) 門中出△身△透法身句也。▽ 身裏出△門△得法身句也。▽ 歸堂問△取聖僧△古今難問答處也。▽ 「一本、古今難答一處也。」

(11) 居△動而常寂△動全靜也。▽ 處△暗而愈明△暗全明也。▽

不墮△邊機△向上玄機也。▽ 正按△當頭也。▽ 傍提△不當頭△處也。▽ 白雲留不住△轉功也。▽ 依△舊△位△就位△出△處也。▽ 出△青霄△轉位出会時也。▽

(12) 泥牛常運步△入海沒消息也。▽ 虛空暗點頭△白雲子就青山父也。▽ 更有△一人未△肯△向上父全不顧△也。▽ 千峰瀉△翠△再歸法身也。▽ 萬谷流△春△又出自己恁麼來也。功位一如也。▽ 木龍吟△子夜△明其異音聞得者稀△也。故云、妙在未前△也。▽

(13) 藏身處△到自己也。▽ 没蹤跡△到向上也。▽ 此事△劫外一氣也。▽ 白髮顏如△玉△却來句也。以此却來何「之以」云向上玄機也。故云、靈然不墮△時也。▽

(14) 無功妙旨△那時△妙要△用△也。▽ 一會潛通△一氣生也。▽ 易△奏高山流水曲△目前作用猶可易、燕語鶯吟悉是△可見道人活計也。▽ 難△傳虛空夜明符△自己△妙△有△猶可難。淵源及尽△スルモ△猶未到。在此兩句△內△外也。▽ 暗中靈句△主△中主也。▽ 化外威光△賓中賓也。▽ 不△行△青嶂路△不△到△位△不知△功△處△深△也。▽

(15) 妙化潛敷△位裏轉側也。▽ 濁紋纔擬△轉△內△出△外也。▽

九霄淨處廊無△疆△九帶共得時、有何極△也。▽ 四海清時明徹△底△此時△內△外△通方也。四賓主共得也。若能如此△是△見堪報不報恩△也。▽ 天水混時秋一色△今時△上△也。▽ 衆星攢處紫微高△日月星辰、歷々明々樣子也。▽

(16) 戶外有△雲△從△斷徑△△功△也。▽ 坐中無△照勝△燃燈△△位也。▽ 功齊超△歷劫△△転△功△到△位△也。▽ 運步不△當△陽△△不是△目前△機△也。▽

(17) 密密現成△位裏妙容也。曾不存尊貴也。▽ 木童敲△月△戶△△却來也。▽ 石筍暗抽△條△向△去△也。▽ 江岸風濤急、蘆村景色幽△活△句△也。若付滋味而見死△句△也。▽

(18) 見聞不昧、聲色純真△見聞妙超彼聲也。▽ 盡△底△承△當△去△一

句便到位也。▽ 满襟秋露湿、一鑑無痕△是活句也。你如何見也。▽

(19) 壓鏡當臺△一段光明亘古今[也]。▽ 一句子當明不當照△在色時非位也。雖然本無融也。一本、色時無位也。▽ 一句子當照不當明△在位時非色也。一本、在位時非色。雖然、本無隔也。▽ 當照當明△那邊一位、妙理也。▽

枯枝頭上雪、不待大陽春△是句ノ如キンハ、以雪為主也。蓋是黑中白也。曾不落今時、為什麼在位云雪。冬是於四時極也。雪藏冬極也。故極上極也。故云然也。▽ 「一本云、如箇句以雪為主者也。蓋是黑中白也。曾不今時色也。為什麼正位曰雪。冬是於四時極也。雪冬之藏極也。極上極也。故云爾也。」

(20) 靈源皎潔△石頭和尚參同契語也。是モ師ノ為ニハ不是ト云也。▽ 「一本云、石頭和尚參同契語是也。為師者不是云也。」海內道人△堂中僧也。▽ 參取箇中時節△位裏消息ヲ知見セヨト云也。▽ 「一本云、位裏消息也。是知見着云也。」

(21) 午燈非照燭△今時之作用ハ奴兒婢子辺ノ事也。▽ 夜炬滿天紅△那邊真到也。便是父娘也。雖然是モ師ノ為ニハ半

提也。▽ 「一本云、那邊真到未到也。今時作用奴兒婢子辺事也。○一本云、今時ノ作用未來也。那邊真到ハ便是父娘也。雖然是也為師半提也。」明暗盡時俱非照△照尽身無依也。▽ 披毛遊火聚、焰裡藏身△自己賓主也。暗中明トモ可見也。▽ 戴角混塵泥、光中転歩△今時主眼也。明中暗トモ可見也。▽ 「一本云。今時主眼也。明中暗可見、畢竟為曰主也。」歷然超化表、浩劫體難分△真到威音那畔也。▽

(22) 明簾未捲、秘殿光舒△位裏深處、密生其氣「也」。未転功也。▽ 金印未開沙界靜、玉輪轉處不當風△借位明功也。一転未帶今時機也。▽

(23) 裹許明如日△夜半正明也。洞然明白也。▽ 虛空無面目、不_レ用巧粧△眉△他無面皮、誰敢辨得「也」。▽

(24) 終日分別△是非好惡也。共是自心「也」。▽ 有理難伸、賊是家親△家醜者可揚外辺也。▽

(25) 當堂不正坐△転功尽去也。▽ 人迷曉徑△戶掛凋林△不拘正偏中間ニ物アリ。「中間有物也」向上事也。▽ 妙體靈然無影跡△向上也。▽ 水声松韻△溪深、月色波光全體妙△密々深々不可思議、不可得句也。又、無情說法トモ可見也。

(29) 又天眞道也。是ノ天眞「者」ト云ハ祖師未西來、少林有妙訣也。満舷空不夜、深意有。「有深意也。」穩密上、鉤時ト云ハ難測時節也。

(30) 雨洗摩尼増秀色、淨躰々處也。是ハ位也。大寂光中、本無出沒、位一边也。

(31) 鏡々相照、光々相入、理事一如也。頭頭上現「雲局膺禪師語。正宗贊。」直饒不レ涉縁、不受位、「終不喚作尊貴。將知尊貴、一路自別。」妙在未分時、仏祖不伝妙也。

(32) 六盆六根也。十語九中不レ如一默、十如是十法界也。十戒界五具「ノ」法門也。釈迦尊ノ之取說法也。維摩一默也。万般「ノ」巧説、爭如實似古玄義也。「蓋是俗典語也。」

(33) 密々親近去、向去スル底人也。「一本、向上底人也。」烏兔任從更互照、碧霄雲外不レ相干、両円共三穿也。両円「者」日月也。日是今時、月是功處也。是ノ二ヲ「箇二處」穿却時、方到位也。故云、不相干。

(34) 古路不レ逢人、自位出色來也。「一牛、一主人也。」五馬、五根也。回互不可見回互也。

(35) 不レ慕諸聖、不レ重己靈、再帰法身也。此時諸聖ハ本ノ在処也。可求アラス也。己靈既転位來、故云、不重也。又ハ万機休罷句ト同可見也。有深一理。又有絶學無為一理也。

(36) 一本云、再皈法身也。此時諸聖有無在処也。非可求也。己靈已轉位來。故云、不重也。又萬機休罷句ト同可見也。有深一理。又有絶學無為一理也。古鏡臺前荒艸秀、此句ハ

自位中出頭、未出今時也。金烏銜片雲、一氣生スル也。玉免常當午、今時作用也。露堂々之義也。

(37) 勝淨妙心、一段光明也。道躰真躰也。鳥道玄、自己主也。又ハ位ノ主也。「自己主也。又位主也。」

(36) 百憶毛頭花開△處々分身不犯錚也。△頭上青灰三五斗△万

法休息「而」千佛モ「也」不知也。△

語端也。△

(37) 見成堂堂△一々也「ナシ」△歴劫何曾異△今日△△「觀」彼久遠、猶如會日也「一句」△半夜烏飛白△如漆。△其間却有眼在黑一片時、誰分黑白「但シ」△白一字極難見也。△白ト道「看」△不犯意「也」。△

(38) 皮膚脱落△向去也。△一眞實△向上也。△綠岩雲抱處、幽蘚翠成堆△功之淵底也。白雲深「而」メ更深也。△魚行沙暗動、終不犯△清波△是句不犯通「ノ」句也。全軀不可見不犯「トハ」也。△

(42) 旨外明△宗、玄中辨△的△劫外春也。不在陰陽「也」△陽春△曲名也。△画角「曲名」錦繡溪辺去△歩々踏著花錦「ノ」路「也」。△新豐路上分△却來「句」也。雪曲吹來也。△

(43) 風暖寒△堤、春回草綠△枯木向暖マサニ笑マントス。寒堤△是功也。転位就功時、風正暖也。△「一本、枯木回暖花將笑。寒堤功也。転位就功時、風正暖也。」靈絲動處金鉤密△転自己行履至那邊也。△不触△波瀾△暗裏收△波瀾△是功也。暗裏「ハ」是那邊也。△

(39) 默耀△軀也。△現成△用也。△丹鳳不△棲△梧△一氣ヲ大極△前ニヲク也。△「一本云、置△大極前△也。」

(40) 鶴夢△功之賓主也。△「一本、功賓主也。」雲容△位「ノ」

行履也。△凋林廻秀△背之時却來也。△靈棹密移△向之

時向去也。△白牛耕盡寒岩雪△転功就位「句」也。△禽鳥不△鳴天地春△曾不落今時作用也。△

(41) 運步不△當△機△移步於位也。△山僧今日也太無△端△言端

(46)世尊有密語「三口月八三」古渡春残「一筆句下」迦葉不_ニ
覆藏、落花流水△世尊密語無レハ、迦葉争得露、古渡花不_レ落

ハ流水争香カラニ、依密語不覆藏知春残ハ、依流水香アラ

ハルゝ也。▽ 「△一本云、解接無根樹能挑海底灯、一夜落
花雨満城、流水淨香、世尊無密語、帝得迦葉之彰、○古渡
花不_レ落、流水争香、○密語依_ニ不覆藏、○知_ニ春残、依_ニ流
水香_ニ彰也。」 海底驪珠貴△心王不動也。▽ 光分宇宙迷
八方通_{スル}也。▽

(47)不变異處△今時「ノ」常住也。▽ 無間断時△自己「ノ」法
身也。▽ 玉壺霜漏永、天外翠峯高△自己の賓主也。「ナ
シ」▽

(48)非幻不_レ滅△這箇還不滅也。▽ 「一本、這箇還不生也。」歌
吹起棹頭風、永夜恣眠逢底月△此兩句只是一句也。深密不
思議ノ句也。▽ 倒一說△是什麼言說「ソ」。▽

(49)歇須_ニ歇得靈、用須_ニ用得密△歇得「ノ」時一念也。用得「ノ」
時万年也。「故云、野菊含金、山泉漱玉、祖師不言「道」
乎、宗非促延、「一念万年去故也。」▽ 一念萬年△雖然與麼
也、懸灌撒手看「ナシ」▽

(50)舟移_ニ遠浦△了々到那邊也。▽ 不_レ迴_ニ古木暖、爭辨_ニ石頭
吟△不因今日事、爭話「語」昨夜夢「ト」一般也。▽

(51)大徹底人△大善知識也。▽ 少林三拜△二祖逢初祖遷化、作
禮而依位立、祖云、你得吾髓矣。師ノ為ニハ是モ茶糊ト落
ス也。▽ 「一本云、二祖逢祖翁達磨遷化、作礼依位而立、祖
翁曰、爾得我髓矣。為師者是也、茶糊也。」茶糊△舒也、
漫貞。▽

(52)風光溢_レ見、翠色滿_レ林△大用現前也。是達磨不會句也。▽

瑞雪点_ニ紅爐△本来無一物也。▽

(53)朝晡飲啄△逢茶喫茶、逢飯喫飯「去」也。▽ 無處_レ藏_レ身
△明々歷々、難逃得「避也」。▽

(54)虛而靈、寂而妙△教誰人知也。〔教誰知得也。〕▽ 不_レ落_ニ鑑
照△綿密「而」不通風也。▽

(55)道_ニ得第一句△初入頭也。「一本、入頭初也。」▽ 識_ニ得拄
杖子、猶是途中事△縱「是」到不疑「之」地、未夢見在。▽
到頭一句△向上「ノ」一句也。▽

(65) 向_ニ那畔_ニへ向_カ去也。▽

(66) 有_ニ一處_ニ不_レ覓_カ自得_カ人々是足物也。▽

(57) 口邊白醭_ハ入頭辺ノ「之」事也。▽ 通身紅爛_ハ玉闕ノノ轉
处也。▽ 不_レ出_ニ門底_ニへ那辺「之」玄機也。有什广出入。▽

喚_ニ甚_ニ麼_ニ作_レ門_ハ有什麼出入矣。▽

法要

(58) 撒_レ手_ハ向_カ去也。▽

(59) 参得快活_ハ是實語實参也。▽

(68) 紙衣下用_ハ垂示_カ也。衲衣下ノ事ト一般也。禪和子ノ一大
事也。▽

機縁

(69) 日照孤峯、翠月臨溪水寒_ハ瑕生也。是什广句。▽ 祖師玄
妙訣、莫_ニ向_ニ寸心_ニ安_ス_ル果然皆是寸心也。寸心者佛出世シ
〔也〕、一祖西來_{スル}也。妙訣者西來前有少林也。「圓悟頌
ハ、君子千里同風ノ趣、師答頌ハ、劫外絕同侶義也。」「一
本云、果然皆是寸心也。寸心者一佛出世也、一祖西來也。
玄妙訣者、佛祖未生前也。」

(63) 坐得脱_ハ井ナカラ死去人也。▽

(70) ~ (80) ナシ

(64) 現成大用_ハ不存軌則也。▽

(81) 何止千里同風「円悟頌、君子千里同風之趣也。」頌答「師
答頌、劫外絕同侶義也。」

(82)～(86)ナシ

(87)相逢相揖眼如眉△特地相見明未萌「也」。▽百鳥銜△花尚未レ帰△自古位來△至△踏佛階△也△。▽回首春風吹△夢断功就色、今朝曉「也」。▽舊山雲散月明時△目前溪谷長綠苔「也」。▽「畢竟歸家貧時、如何終日堪聞伐木聲。」

(88)半夜不レ挑レ燈△都絕消息去也。烏投黑馬也。▽

偈頌十首

(89)兀兀忘△機巧△転色就△心△位△。▽灰來已得△純△盡心到△玄△虛明無△間斷△夜半正明△淨妙絕△疎親△依裏了然△轉側△密戶寒燈曉△潭底一波△靈花古洞春△劫外點花△

回途賡△雪韻△白馬踏雪△門裏綠苔親△芦花生處△

(90)湛寂凝然透△一句方到△孤明徹底空△那裏妙處△秋風生△舌韻△再帶月明△晚月上△寒松△日出東天△量外千差泯△那邊且到△致△機前六用通△眼下見色△忘△兼帶△位深々處△寥寥罷△晚機△未曾通風△雪消成△底事△今日堂々△畢竟不留△蹤△融然△月花△自在△

(91)只麼堆堆地△今時作用△常光密露時△能為月前△玄途中轉△借功明位△傍來曉路歸△借位明功△絲毫都及盡△功位俱忘△不覺口如△眉△位裏妙容△

(92)徹澄無△凝碍△位高心外△情塵迴脫然△不用今時△全機忘照外△絕却照用△一句未分前△混沌一氣△枯木雲籠透△轉位就功△寒潭月夜円△月明一色△回頭開△正眼△轉功出色△芳艸破△春烟△一條活步△

(93)路斷無△依著△色盡功成△空船載△月帰△轉功未妙△力窮忘△一色△却坐位中△功盡喪△全機△君臣合道△

(94)意句難△分別△言語道斷△風騷格外求△瞎却眼睛△提△刀空△四顧△截斷凡聖△駐△步失△全牛△落在半邊△

密_ニ混凝流_一處_ハ出頭來也▽ 融通向背時_ハ彼此混然▽ 古帆
風靜夜_ハ人間好々▽ 任運應_ニ高底_ハ一片神光▽

却一轉妙中之回互、未曾墮偏正方▽

(97) 密密梭頭事_ハ石女居位▽ 機絲不_レ掛時_ハ木人把印▽ 木鷄
啼_ニ曉戶_ハ一氣生也▽ 石女夜生_レ兒_ハ異花一枝▽ 已發_ニ
寒灰焰_ハ從位出功▽ 難_レ埋_ニ古塚碑_ハ於功明位▽ 荒郊春
艸綠_ハ一塵諸塵▽ 風暖共依依_ハ東西南北▽

(101) 萬緣歇盡照無_レ時_ハ知盡功忘去也▽ 撒_レ手忘_レ依有_ニ路帰
△妙極而線路分「也」▽ 劫外一壺春色暖_ハ枯木開花容「花
開」▽ 靈苗石上正芳菲_ハ回途艸芊々▽ △畢竟不涉去留相又
如何、良久云、夜明簾外主、不_レ落「墮」偏正方「云也」▽

(98) 島道通身去_ハ轉色忘功▽ 迢迢劫外參_ハ猶帶凝然▽ 隨_レ流
忘_ニ朕兆_ハ又相隨來也▽ 癡兀未_ニ曾閑_ハ未出凡境▽ 瞬
視成_ニ途轍_ハ直來難出▽ 揚眉落_ニ三_ニ生下道著▽ 只
應_ニ無見頂_ハ正體不藏▽ 子夜白雲漫_ハ三處共合▽

(102) 線道難_レ分處、須_レ知_ニ不是伊_ハ君臣合道時、教誰知_ニ也▽
牛頭按_ニ尾上、豈借_ニ大陽輝_ハ牽轉牛鼻欲耕破劫空田地來、
位裏「也」「之」轉側已分、線路是空劫已前事也、又是回
互也▽

(103)
(104) ナシ

頌古

(99) 寒明一點墮_ニ空林_ハ錯不用墮空林▽ 朕兆依稀已觸_レ今_ハ錯
不用已觸今▽ 目擊正容成_ニ滲漏_ハ錯不用成滲漏▽ 青天
白日轉迷_レ人_ハ畢竟如何錯錯瑕生也。此頌一列極難見也。

須實參。▽

(100) 乾坤那畔類難_レ齊_ハ硬如鐵▽ 千聖從來不_レ識_レ伊_ハ無人識得
伊、不_レ諸聖行履處「云也」▽ 家破人忘迷_ニ肯重_ハ不還者返
「辺」差別「也」▽ 夜深寒塔影空乖_ハ「明」到玄妙極位、

〔翻刻凡例〕

一、本資料は、岸澤文庫に所蔵される『真州長蘆了禪師劫外錄抄』（貫之梵鶴抄）を忠実に翻刻しようとするものであり、本論集への掲載は今回で三回目の連載で、『梵鶴抄』原文の翻刻はこれを以て終了する。なお、言及が不十分に終わった本資料に関する研究の公表、乃至公刊をも含む全体のまとめについては、別途に考慮したい。

一、『劫外錄』の本文については、今日知られる範囲で異本校訂の結果を注記した。ただし、改丁については（ ）内に丁数・表裏（オ・ウ）を付記したが、改行は指示しなかつた。

一、翻刻に当たっては、異体字・略体字・別体字・俗字等も忠実に再現することにつとめたが、省文等、活字用正字に改めたものもある。また、原文では省略されている慣用禅語等については、必要に応じて「」内に補つた。

一、『劫外錄』の異本校訂に用いたテキストは、基本的には「寛永本」「面山本」「万安抄本」の三本で、それぞれ「寛本」「面本」「万本」の略称を用いた。

一、西明寺本『大乘開山註』に部分的に引用された『劫外錄』の本文について、該当する個所があれば「大本」と略称して校訂に用いた。

一、『梵鶴抄』の匡郭外にある抄の摘要については、後人（岸沢師）の筆跡で、抄の内容を出るものでもなかつたので、今回はこれを省略した。

一、上堂以下の部分については、整理のために各段落にしたがつて通し番号をつけた。

一、西明寺本『大乘開山註』に抄・註等が存する部分については、各段落毎の末尾に「徹通和尚之註」として、二字下げ、活字のポイントを落とし、一括して掲げておいた。また岸澤文庫所蔵の面山本『劫外錄』に書写された『大乘開山註』との異同については、（ ）内に記しておいた。

本
文
校
訂

機縁

(69) 師初見レ丹霞。々問、作廣生是空劫〔已前自〕己。師擬レ對。霞云、你鬧、且去〔114〕

ト云レテモ、爰ハ、一日登鉢孟峰、豁然契悟、退歩メ、承^{タチ}當シタゾ。徑^テ坂見レ丹霞、方レ侍立、霞

劈耳便掌云、將謂你知有〔ルヲ〕トハ、知有處^ヲ、便掌〔朱消シ〕師云忻然礼拜。サテ、心ヨク

来日霞上堂云、日照レ孤峯翠、月臨^レ溪水寒。トハ、鉢孟峰ノ景色〔ヲ云タゾ〕此ガ、^{〔玄妙〕}詠、莫

〔尚寸心〕 安^ル。聖ノ心、共ニ病^ハ。此二ノ心ヲ安セヌ処ガ、已前ノ自己ナリ。凡^ト師云、今日陞座、

便瞞レ我不^レ得也。トハ、自己契當ノ処ヲ、ナヲ霞云、你試舉我今日陞座〔ト、勘弁モ能ク令レ徹底為ゾト〕看。セラレタ

ゾ。師良久。語デモ、黙デモ、只居^デモ無ゾ。寸^{〔モニ〕}霞云、將謂不^レ管一地。イヤ^ハ、ソレ程ト

バ、ト師抽身便出、證明ノ処ヲ、全提ト、モタ霞一日在^ニ方丈後^ニ坐。方丈ノ因ナリ。又^ハ、^{ヌゾ}更ニ落居モ無^ハ。霞

ノ消息哉ト師問訊。霞見^テ來不^レ顧。見^テ來不^レ顧トハ、見^テ又^ハ、勘弁^ハ。師云、維^{〔摩〕}廣道^{〔シシ〕}トカ思^テ、則^ハ、師問^ハ訊。トハ、文殊問^レ維^{〔廣〕}、何等是菩薩入不^ニ法門。維^{〔廣〕}默然。文殊讚嘆云、善哉、々

便生^レ讚嘆。トハ、至無^レ有文字語言、是真入不^ニ法門。此默然、良久。一般^ハ、自己姿ナリ。霞

微^{〔117〕}唉^ハ、機相合^シソ故ナリ。師礼拜。霞云、你不^レ待^ニ我^レ為^レ你說^一。至^レ此ハ、千聖モ、万達師云、

(114) 寛本・万本「已」ニ作ル

(115) 大本「日」ニ作ル

(116) 寛本・面本・万本「箇」ニ作ル

(117) 寛本・面本・万本「笑」ニ作ル

我又不^ニ是患^一聲^一。トハ、疾^ニ聞^一。テ取^テ走[。]

〔徹通和尚之註〕

上堂曰、日照孤峯翠、月臨溪水寒。是什廣句。○祖師玄妙訣、莫向寸心安。果然。皆是寸心。寸心者、一仏^(出)也。一祖西來之(也)妙訣者、佛祖未生前。圓悟云、○頌、君子千里同風也。師答頌、劫外絕同侶義ナリ。頌曰。

(70) 師見三石門和尚。門問云、終日勞々、成得什廣邊叟。トハ、用ヲ以テ問タジ。師云、須レ知有不勞々者。トハ、師ハ体ヲ以テ答タジ。門云、作廣生是不勞々者。トハ、徹處。師云、要且不^ニ敢^テ安^ニ名立^一字^一。トワ、体處ヲ云^ヘ。問云⁽¹¹⁸⁾、你是識來不^レ敢、不^レ識來不^レ敢。ト重テ探師云、撓不^ニ恁^モ廣^モ。トハ、体用共及尽シ。問云⁽¹¹⁹⁾、畢竟如何。師良久。體用一致、勞々不^ニ勞門^ノ云、正是勞々者。タゾ^ト落シ師拂袖便出。ドコニ位處落着ガ有ル^ト。更ニ方處ハ無キ。

〔徹通和尚之註〕 ナシ

(71) 師在南陽、再見丹霞、侍立次、霞云、你為我淨髮得^{エテン(摩)}广。淨髮トハ、身ヲ淨ニ趣向スル姿。師便安^ニ排水^ヲ、於霞前而立^ツ。丹霞ノ乞處^ヲ動タジ。霞云、你得^リ⁽¹²⁰⁾不^ニ恁^モ廣^モ純熟^一。ト、證明^ヲ云タゾ^ト。君ニ親近シ、趣向スレバ、臣ノ上ニ君ノ道アリ^ト。君云⁽¹²¹⁾、淨洗濃粧^ヲ、為阿誰^{ゾヤ}、云々。師云、猶是奴兒婢^一兒。知^レ法者、懼タジ。聖顏^ヲ不^レ犯^ヘ。霞云、那一人在什廣處^一。ト探竿^ト。師、不^ニ對^ト。不^ニ對^{コソ}、面白ケ^ト。霞云、也是奴⁽¹²²⁾兒^{〔見婢〕}。不^ニ對^ハ。

至極ノ動ナレ共、此ヲモ全提ト
以テバ、犯ゾ。更落着ハ無。

〔徹通和尚之註〕 ナシ

(72) 師過三香山庵中^ニ見^レ師叔[。] ^{スニ}々々ハ、丹霞⁽¹²³⁾々問、近離什廣^(モ)處。師云、丹霞。山云、
還見^レ丹霞^{广。} ^ヲト云語勢ハ、直^ニ見^{タト}云ハ、千里外[。]師良久云、不^レ離^(離)一步。良久ハ、本位^ヲ一[。]山云、不^レ
虛^(リニ)參^ニ見^セ丹霞[。] ^{トハ}マツソウタ[。]トハ、趣向ノ辭[。]師云、也^タ不^レ得^ニ草々[。]トハ、趣向セバ、^{コラ}遠背スペキ[。]山云、只如^{シバ}僧[。]
問^カ思和尚佛々的⁽¹²⁴⁾々大意[。] ^{トハ}庵陵采價作^广生[。] ^{ト云テ}此古則ヲ問タハ、回互[。]不^{回互}共[。]師珍重⁽¹²⁵⁾
便行[。] ^{タハ}奇特ノ動ナリ。何[。] ^{トハ}共理ハ、ヲ付テハ、サテ[。]

(123) 面本「叔」ニ作ル

(124) 寛本・面本・万本「法」ニ作ル

(125) 寛本・万本「蘆」ニ作ル

(126) 寛本・面本・万本「珍」ニ作ル

〔徹通和尚之註〕 ナシ

(73) 師見^レ深^(州)忍[。]々問云、甚^(モ)廣[。]處來。師云、丹霞^{ヨリ}來。忍云、親^ク見^レ家來[。]師云、
且^ク莫^ニ壓^レ良為^レ賤。トハ、親クハ見^{マミ}忍搜^レ拄^一杖。タ意ハ、親ト云コソ、千里外ヨ、
云、和尚、尋常大^一小^一便^一利教^ニ什廣[。]人^ニ勾當[。]捉住^メハ打^レ某^ヲハ、且^ク置^ト云心[。]サテ[。]
ヲバ、他人ガ知ル⁽¹²⁷⁾忍便喝。メハ、打タト同イ[。]師云、勘破了也。トハ、親處ハ夫般^ノ振舞ハ[。]
物ゾウカトベ。棒ト喝ハ、一般[。]未在ト云、巴鼻^カ、抑下[。]

(127) 寛本・万本「師」ニ作ル

〔徹通和尚之註〕 ナシ

(74) 師見レ保寧。々問云、江一河競一注而不レ流。豈レ不ニ是遷中明^{ルニ}不遷^ヲ。此問ハ、是肇法モ、溺レヌ物タゾ。夫ヲ舉ノ間タゾ。師拈レ火夾堅起^ソ云、和尚喚レ者^ヲ个作^レ什广^{トカ}。⁽¹²⁸⁾ト云、入レ水テモ、不遷ナ一物ハ、入レ寧云、老僧命^カ根、在ニ子手裡^カト⁽¹²⁹⁾ハ、ウワツラハ、證明ノ語火テモ焼子バ、不遷ナ物ヨ。火夾コソ、聖凡ノ命根ヨ。師便放^ヲ下火夾^ヲ、便行^ヲ。不遷ノ商量了タ程ニ、放下ノ行クナリ。

〔徹通和尚之註〕 ナシ

(75) 師到レ智^一海、見レ佛鑑^二。々見^テ來、駐^レ歩望^レ師。是ハ、互ニ作家向上ノ相見ナホド^二、^テ相見了タ^{レバ}、^テ去社^ニ、師近前方擬^{レバ}問^一訊^二、鑑便^{レバ}阪方丈。ソガ、別ニ夏ハ無^ゾ。師隨^{レバ}後云、且容^ニ轉^{レバ}身吐氣^ヲ。トハ、相見ノ眼ヲバ、不妨^{レバ}。鑑回^{レバ}首。果然ト^メ、上^ノ釣竿^ヲ。師云、不審^{ト云テ}便^{レバ}回^{レバ}。不審ハ、如何ト云心別ニ一句ト、心眼ヲ乞^{タゾ}。振舞^ニ不相應^{ナレバ}。抑下^{レバ}。

(128)

寛本・面本・万本「箇」ニ作ル

(129)

面本「裏」ニ作ル

(76) 師到_テ法雲見_{ニル}佛照。々從_リ法堂出。師云、好_个⁽¹³⁰⁾阿師、恁_广去也。トハ、去底_ハ

(130) 寛本・面本・万本「个」ヲ「箇」
二作ル

照顧_レ師。タハ、眼々相對_{ソゾ}。爰_デ、々便下_レ法堂。有_レ僧云、也_{マタ}須_ク子細。トハ、下ル底

ト勘弁_{ソゾ}。師云、和尚尋_レ常向_レ你道_レ什_广^(魔)。トハ、フツト理_ヲ説破_ヲ、

説夕夏_ハ有_ルマジイゾト_バ。僧云、拈_コ却_シ山_一河

大地明暗色空_ヲ、向_ニ什_广處_ニ安身立命_ン。

什_广處_ニカダ肝要ナ_ヲ、此僧ハ言句斗_ヲ聞得_テ、

意_ヲ不_レ知_ヤ。是何物_ゾバ、知ラザルナリ。

云、你且_レ來、我更問_ニ你一轉公案_ヲ。僧隨_テ師至_ル三門_{サン}。至_ル三門底_ヲ、何_物ト_ハ知ラス_ゾ。師云、(34才)

夢見_{ニモルヤ}法雲_ヲ⁽¹³¹⁾。一生涯左右_ニ隨遂シタリ共、其人ノ本イヲ知子_バ、

見ヘヌ物_ヨ。一度モ見タコソ、夢ニモ見レ。

(131) 寛本・面本・万本末尾ニ「魔」ア
リ

〔徹通和尚之註〕ナシ

(77) 師見_レ雲蓋_ヲ。々問云、女子出定話、你作_广生會_。此話ハ、女子ノ何_ヲモ知ラズ_ノ、愚

ナ處_ガ、佛ニ近_ゾ。去社、能入_レ定

タ_レ。師云、合_ニ取_ヨ皮袋_ヲ。タタトハ、唇皮_ハ。合取_{レバ}、入定_ハ、愚

レ_。蓋_云、不然_。トハ、イヤ

我且入_レ定、你試出_レ看_。ト云_ヲ⁽¹³²⁾ササヘテ_ヲ足_ヲ而坐_。直_ニ成_レ女人_。師和_レ身推_レ倒_レ便_レ出_。タハ、

罔明_ノ

(132) 寛本・面本・万本ニ「你」ナシ

(133) 面本ハ「斂」ニ作ル

出_得タヲモ、文殊ノ大定大智ナニ依_テ、出_不得_ヲモヒン卷_テ、推倒_メ、便出_{タゾ}。出_得・出_不得_ニ不_レ拘_{コソ}、却外_ヨ。

〔徹通和尚之註〕ナシ

(78) 師見^ニ長芦^一。祖煖^一。々見^レ來便^一問、甚^レ廣處僧。師云、川僧。煖云、年多少。⁽¹³⁴⁾

師^ニ云、二十六。⁽¹³⁵⁾ 来處ヲ問^{ヘバ}、來處ヲ答^ヘ、甲子ヲ問^{ヘバ}、甲^ニ煖^云、猶自亂^ト走^{ル^リ}在^{在。}トハ、前^來タ^ダ。師撼^レ禪床^一云、只在^レ者^リ裡⁽¹³⁷⁾。トハ、禪床ト見レバ、動搖^ニ落ヌゾ。踏^レゾ。師便^{(34)ウ}⁽¹³⁸⁾禮拜[。]々々ハ、尊貴ノ位[。] 実地バ、去々來々、者裡ヲ離^レザル。煖便喝[。]再三試^タ。

〔徹通和尚之註〕ナシ

(79) 祖煖一日同^レ師到^ニ延壽堂^一。煖問^レ病僧云、你作廣生。僧云、傷^ニ風頭疼^ヲ。トハ、直^ニ病苦ノ痛[。] 煖云、傷^カ左邊^ヲ、傷^カ右邊^ヲ。

トハ、法令ノ病ニ^シ問タ^ゾ。左右ニ不^ル。僧無語。僧爰^{ヘハ不^レ及[。] 初心者ナル故ニ、師云、者^ノ僧却安樂[。] 只是不^ニ肯參堂[。] トハ、真歇ハ、無語ノ處ヲ扶テ、左右ニ不^レ落處ハ、語ニ出サレヌ一處ヨ。底ニ病ハ無^ゾ。參堂ハ、飯堂[。]}

〔徹通和尚之註〕ナシ

(80) 佛眼到^レ長芦^一。師詣^ニ知客寮^一問^ス。眼見^テ來[、]於^ニ眉^ヲ案上[、]拈^ニ起[、]鏡子^ニ便^レ煖[。]

向上ノ勘弁[。]信唇ハ、鏡ノ塵垢[。]故ニ於^レ案上[。]是ハ^ニ是[。] 灑^ヲ試^タゾ。影像^ヲ移^スハ、真実^ニ似^テ、別ナレバ、バケ物[。]故ニ云、師云、者野狐精。探頭^ハ

ノ機ニ當テ云々。鏡ハ影放^ス下鏡子^ヲ。垢^ヲ尽影像無^レ。師便^レ出。不^レ認^ヘ。至^レ晚澡^ス浴。形体像ノ移ガ、バケヤウ^ヘ。眼放^ス下鏡子^ヲ。垢^ヲ尽影像無^レ。師便^レ出。不^レ認^ヘ。至^レ晚澡^ス浴。形体像ノ塵垢^ヲ淨メン為^テ。眼自携^テ浴具到^ル厨門前^ニ。見^レ師^來、眼云、如何々々。重^テ鏡ノコブシ^ヲ以^テ、勘弁^メゾ[。] 師云、和尚莫^レ要^ル^{〔35オ〕}个人^{〔140〕}随^レ後^广^{〔139〕}。个人トハ、那一人[。]主人公ノ更ヨ。隨^レ後トハ、眼提^ヨ起浴具[、]復云、已在^レ者^{〔141〕}裡[。] トハ、个人^ノ侍者ニ成リ、成近シヤウ^ヲ呈タゾ[。] 師揖^云、揖ハ、恐ル振舞^ヘ。燒湯已^{〔142〕}弁[。] 今日ノ風呂ハ、能ク立眼便過^ハ、師便行[。] 相互ニ垢^ヲヌイタ。依タヨト[。] 商量了^ジ。眼便過^ハ、師便行[。] 相互ニ言句モ無イゾ[。] 依

〔徹通和尚之註〕ナシ

(8) 佛果^{トハ、圓悟^{〔師〕}}、到^レ長芦^{、トハ、真歇^{〔西方丈〕}}、住院^ス。師相^レ見[、]相^レ並^テ而坐[。]果便舉^ニ廊侍者^{〔禪^{〔币〕}〕}。
 問^{〔144〕}惠山公案^{〔作廣^{ミミトハ、}}。廊侍者ハ、臨濟下ノ人[。]問^レ惠山[、]從上^ノ諸^{〔聖〕}、向^レ仕^{〔答〕}處^{〔去〕}。勘弁^ソゾ[。]山云^ノ、彼此ノ差別^ヲ不^レ立間タ、去來^ノ相^ヲ分別セヌゾ[。]作廣^{ミミハ、}問^レ處^{當ル}答^{〔答〕}。廊云、勅点^ノ飛龍馬[、]跋籠^{出頭來トハ、}先^ジ惠山^ヲ抑下^{メ、}飛龍馬^{ト思タレバ、}一向^ノ跋籠^{ゾト[。]} 庵イハ、飛龍トモ、跋籠共、落着セヌゾ[。]山便休^{メハ、}何共^アイシライ有レバ、様子ガ定ル故ニ、便休^{メゾ}。更ニ窮限^ハ無^ゾ。來日浴ヨリ出、廓過^レ茶与^レ惠山[、]是モ伝イハ、眠^ヲ醒セト云エズイキデ、与タゾ[。]山撫^レ廓背^{ハ、}小童^ノ動^{〔勵〕}ト見^{テ、}一向^ノ鎌鍔^ハ無^ゾ。廓云、這老漢、今日方^ノ始督地^{トハ、}今コソ、宗門ノ極則ナレ、ト云^ヘ。山又休^{メハ、}惠山ノ宗風ニ、此ガ肝要・極則ト云理^{ハ、}無^ヘ。故ニ、休處ガシタ、カナレタゾ[。]此公案^{以^テ時築^{〔ラテ〕}師^{云、}}因^レ甚兩度不^レ彩^レ他[。] 惠山ノ兩處ノ休^{ヲ、}不足^ゲニ云^{ナシ}

(143) 寛本・面本・万本ニ「了」アリ
 (144) 寛本・面本・万本「徳」ニ作ル

(140) 寛本・面本・万本「箇」ニ作ル
 (141) 面本「裏」ニ作ル
 (142) 寛本・万本「已」ニ作ル

テ、勘弁 師亦築云、莫レ誇⁽³⁵⁾人好。人トハ、惠山ノ休処ヲ不足ニ見タハ、果大笑。ノミ口
裡ヲ見ヨ。奥^ノ底ハ、無^ク機々相投ゾ。師云、者賊。洞上^ノデ、賊ト云ハ、極位・向上ノ主ヲ云
ゾ。二老機々相投ゾ。師ノ胸懷ヲ、不^レ残サガイテ見タゾ。

佛果令レ僧馳レ眉到、師開^テ見^{ルニ}頌云、宣化渡^ヘ頭作^レ別、譬如ニ兩^ノ鏡相^レ照^ム。何^ソ止千
里同^一風、全^ニ提^ス向上^ノ一竅^ヲ。大乘云、君子ハ千里同^風。云、超^ヨ越^{スル}之^ニ。師問^レ僧、作^カ生是向上^ノ一竅^ヲ。僧ヲ
勘弁^ノノス。僧擬^レ分^{ント}疎^ト。師云、且莫^レ辜^レ負^ム。⁽¹⁴⁵⁾〔師復有^レ頌答云運用堂堂^ト本妙、徹^ノ底不^レ
落^レ鑑^一照^ム。夏モ無^ズ。即^メ一^ニ言及^ヨ尽^ス鋒^一鉈^ヲ、只^レ个更無^レ孔竅^ト。大乘ハ切外絶^ト、⁽¹⁴⁶⁾同侶^ノ義^ベト、
離^離義^ベ。ドコ迄モ、圓悟^ノ一重上^ヲ帯^ハ動タゾ。〕

〔徹通和尚之註〕 ナシ

(82) 師見^一超首座^一、超^ス舉參^二仰山^一偉和尚^一。一日入^一室^一。蜂^一子^一打^レ窓^ヲ、偉云、你^一還^レ
捉^レ得^シ广^ヤ。^(離)トハ、虽^レ為^レ小虫、以^レ頭尾傷^レ人、毒虫^ト。頭尾^ヲ、^(※)〔超^云、捉得^{セシ}。偉云、爾試捉^ヨ。
迷悟^ト。以^レ是勘弁ゾ。〕⁽¹⁴⁷⁾仰山^ヲ蜂子^ニ作^ソ。〔⁽¹⁴⁷⁾テ^勧〕
超以^ニ兩手^一、法^ニ偉頸^一叫云、捉得也。」偉^ト咲^テ云、你^只解^レ騎^レ虎^一頭^ヲ、我^ヲ蜂子^ト見^{タハ}、大^ニ膽^ナ者^{カナ}
ト^下抑^レ下^ノ。超云、要^レ虎^一尾^也不^レ難^ト、放^レ手^便礼^一拜^ヲ。⁽¹⁴⁸⁾ト、我^一動^ハ、^(勧)サテ勇^ニハ^シ。師云、仰山
可^レ惜^ト、痛^一棒^ヲ放^レ過^了。⁽³⁶⁾〔^(オ)サテモ^ク、我ナラバ、卅^ト超視^レ師^ヲ、良久。スルハ、棒^ヲ下^シ
ミタゾ。〕

(145) 「」内ハ行間加筆、岸沢師ニヨル
(146) 寛本・面本・万本「箇」ニ作ル

(147) 寛本・面本・万本「笑」ニ作ル
(148) 寛本・面本・万本「便」ナシ

不立ノ用
处カト、師云、者、漢、猶自弄^ズ精魂。トハ、其ノ如ニツク子物ニソヲカバ、夫コソ、精観ヲ
ドコ迄モ精観ヲ弄
メゾトナジル。

〔徹通和尚之註〕 ナシ

(83) 師問^レ僧、甚广処^{リカ}來。僧云、天寧卓和尚処^{ヨリ}來。師云、天寧向^レ你道^レ什广^{トカ}。⁽¹⁴⁹⁾
僧云、拳^ス、雪峰道^一、望^{テモ}笏亭^カ、与^レ你相見了也。更來^{ニテ}者裡作^レ什广^カ。トハ、三處^ニ不^レ
相見^{ナニ}、來^テ。師云、天寧被^ル你當面勘破^セ。夫ハ、你ヲ勘弁スルトメ、僧云、和尚也^{不^レ}
ノ用處^{ハト}。師云、天寧被^ル你當面勘破^セ。却^テ你ニ勘破セラレタゾ。僧云、和尚也^{不^レ}
得^レ瞞^レ人。トハ、此僧ハ、某ヲケウ⁽¹⁵⁰⁾。師豎^レ拂^一子云、你喚^レ者^ヲ个作^レ什广^{トカ}。トハ、払子ト見
ヌカト^ス。不見^ガ、相^タゾ。故ニ別見^ス。僧云、拂^一子。此僧、ヨク^ス。師云、却^レ是^レ你瞞^レ我。^{上ハ}證明^{ソヤウナガ}、^{底イハ}、落^シ語^ベ。払
子ハ、払子ト見^{ヌコ}ソ、你相見ナレ。

〔徹通和尚之註〕 ナシ

(84) 師問^レ僧、近離甚广^レ處。僧云、雲居。師良久云、見^ル和尚广^ヤ。僧云、見^ル陞座^ヲ
拳^シ洗鉢盂話^二了^テ、呵々大¹⁵¹笑云、此¹⁵²ヶ公案、⁽³⁶⁾甚^{ナシ}是穩密。又呵々大笑云、此^レ

(149) 寛本・面本・万本ニ「天寧」ナシ

(150) 寛本・面本・万本「箇」ニ作ル

(151) 寛本・面本・万本「笑」ニ作ル
寛本・面本・万本「箇」ニ作ル

ケ公案、甚⁽¹⁵³⁾是穩密。ミトハ、祖佛凡夫共ニ、不知處^レ。爰ガ、此話ノ肝要タゾ。師云、雲

(153) 寛本・面本・万本「箇」ニ作ル

居為^レ什广脚^一跟不^レ点^ル地。トハ、先ツ雲居ニ當テ、此僧云、什广處^{カレ}是雲居脚^一跟不^レ点^ル地。師云、隨^テ我舌^一頭^一走。トハ、真ケ雲居ノ不^レ踏^レ實地トハ、真歇モ思召子共、僧擬^一議。果^{ノ不^レ會^{ノ動ヲ}見^ル為被^レ仰タハ、隨舌頭走^ル。一旦此僧ノ動ヲ見^ル為被^レ仰タハ、隨舌頭走^ル。然^{タゾ}。故ニ^テ師打云、你夢^{ニモ}見^ル广。サレバコソ、貴方ハ雲居ヲバ、另ニモ見ヌ者ゾトハ、知^ニ不^レ落ヌ處^カ、喫粥話ノ本イ^ハ。此コソ、空^カ劫已前自^レ己ヨ。其僧ヨ。}

〔徹通和尚之註〕ナシ

85 師問^レ僧、甚广處^一來。僧云、佛果和尚處來。師云、室中^ニ向^レ你道^レ什广。僧^{トカ}云、覲^一面相^一呈不^レ得^レ差過⁽¹⁵⁴⁾。トハ、左轉右轉、覲面^{ミニメ}、師云、苦哉。作^ス者⁽¹⁵⁵⁾ノ語^一話^ヲ。トハ、此僧ノ一僧云、未審、和尚此^一間如何。ト果然^ソ上^レ師云、蹉過了也。ソ圓悟^ニ示^レ你、覲^一面僧、擬^一議。スルホドニ、差過^{タゾ}。師便打^(37オ)。ノ示^レ差ナリ。

(154) 面本「蹉」ニ作ル
(155) 寛本・面本・万本「箇」ニ作ル

〔徹通和尚之註〕ナシ

86 師問^レ僧、近離甚广處。僧云、五祖。師云、五祖有^ニ何言句^カ示^レ衆。僧云、法^ニテカ^ノ

堂上有レ一一牌。々上有ニリ字云、五祖有ニ三轉語、方來衲子道看。^{ヘン}三轉語トハ、法報廣^(應)ノ三
此三句ニ過タルハ無^シ。師云、我者^カ⁽¹⁵⁵⁾裡一^一轉也無^シ。ト、真歇ハ、クツトシリ。空假中ノ三諦^シ。
頭何^{ヨリカ}ル。トハ、此僧モ只者デワ無^シニ依テ、何ヨリ来ルト。上テ、向上ニ行履^シ。僧云、問^テ
問^テ御^{〔座有〕}ルワ、サノミ打上タトハ見ヘヌゾ。師喝云、喫^ニ五祖^ニ多少飯^ヲ也。
トハ、飯袋子ノ。僧、擬^シ議。ソワ、面白振舞ナゾ。真歇^ノ不^レ擬議ナリ。去社、師云、草賊大敗。ト見破^メゾ。真歇
漢ト落シタゾ。僧、擬^シ議。个ノ不^レ擬議ナリ。去社、師云、草賊大敗。向上作家故^{ナル}。

〔徹通和尚之註〕ナシ

(87) 師問レ新^ト到^レ甚^廣處僧。々云、祥雲菴主。トハ、正直^{タゾ}。師云、菴中^ト更作^广生。ト
主ヲ不^レ主云、種^ヲ田博⁽¹⁵⁷⁾飯喫^ニ。至極^ノ行履^ヲ述タゾ。師云、喫^ニ多少辛苦^ヲ作^广生。トハ、
犯^ハ。主云、種^ヲ田博⁽¹⁵⁷⁾飯喫^ニ。至極^ノ行履^ヲ述^{タゾ}。師云、喫^ニ多少辛苦^ヲ作^广生。トハ、
ハ、錯妄然^ノ問タゾ。什^ノ主云、若不^レ恁^シ廣^ト、争^カ到^レ者裡⁽¹⁵⁸⁾。トハ、種^ヲ田行履^{ナラズ}ンバ[○]。師
广^ノ多少辛苦^{カアラン}。什^ノ主云、若不^レ恁^シ廣^ト、争^カ到^レ者裡⁽¹⁵⁸⁾。トハ、種^ヲ田行履^{ナラズ}ンバ[○]。師
休^{キウス}。無^ハ。故^ニ便^シ休^{ソゾ}。一日來^{(37)ウ}⁽¹⁵⁹⁾辭乞^レ頌。師云、前^ト日公案未^レ了、畢竟菴中^ト更
作^广生。ト、重^テ勘弁^ハ。主云、旧^ト時院^ト主今要^レ遷^シ移^ト。足ドガマワツタゾ。師喝云、什^ノ广^處^ニ
去^來。迁移トハ、何^ヘ去^リ、何^{ヨリ}來^{タゾ}、ト落ソゾ。乍去^ト、遂与^レ頌云、相^シ逢相^シ揖眼如^レ眉。此庵中ノ主ニ、特地
萌末^レ崩^ハ。百鳥^卿⁽¹⁶⁰⁾花尚未^レ販。大乘^云、古位ヨリ來^バ⁽¹⁶²⁾。大乘^云、古位ヨリ來^バ⁽¹⁶²⁾。大乘^云、古位ヨリ來^バ⁽¹⁶²⁾。
大乘被仰^ハ。百鳥^卿⁽¹⁶¹⁾花尚未^レ販。大乘^云、古位ヨリ來^バ⁽¹⁶²⁾。大乘^云、古位ヨリ來^バ⁽¹⁶²⁾。大乘^云、古位ヨリ來^バ⁽¹⁶²⁾。
旧山雲^散月^明。明^ト。目前ノ渓谷長^レ綠苔ト、大乘ノ注^ハ。旧院主トハ、本得ノ人^ハ。千移シヤ⁽¹⁶³⁾。出ハ^ハ。功トハ、仏階級^ト。此ハ、房中タゾ。雲霧タゾ。回^レ首トハ、

(156) 面本ニ「裏」作ル

(157) 面本「博」ニ作ル

(158) 面本「裏」ニ作ル

(159) 寛本・万本「辭」ニ作ル

(160) 大本「白」ニ作ル

(161) 寛本・面本・万本「銜」ニ作ル

(162) 大本「頭」ニ作ル

(163) 大本「洞」ニ作ル

本ノ空「劫已」前エ回ノ首也。此时、夢モサメ、
雲モ散シ、月明ゾ。白鳥飯テ、修證尽タ処ナリ。

〔徹通和尚之註〕

相逢相揖眼如眉△特地相見、明來崩也△。白鳥卿花尚未飯△自古位、未至佛階也△。回頭春風吹
夢断△轉功就色、今朝晚也△。旧山雲散月明眩△目前溪谷長綠苔△。下、飯家貧眩如何。終日堪
聞伐木声△△。

(88) 師問レ僧、枯木裡龍吟、什广人得レ聞。⁽¹⁶⁴⁾ 枯木トハ、夜半正位ヲ云タヅ。龍吟トハ、陽ノ

聞耳也。曉天ノ響シヤ。犯セバ、早傾タヅ。^(佛)

僧云、不レ墮レ凝然者。凝ハ、コウル。正當ヲ云タヅ。師云、猶有レ朕迹在。⁽¹⁶⁴⁾

トハ、夫ハ始終ニ落チ、本末ニ涉テ。僧云、作广生是絶レ朕迹底。師云、⁽¹⁶⁵⁾

陽ニ落チ、ト落シタヅ。師云、猶有レ朕迹底。師云、⁽¹⁶⁵⁾ 半夜不レ挑レ灯。⁽¹⁶⁵⁾

半夜ハ、不妨枯木也。不レ妨

灯トハ、半夜ト犯ヌ義也。此ガ、龍吟ノ聞ヤウ也。此僧ノ動モ隨⁽³⁸⁾分ナレ共、師ノ答話ヲ以テ、謗訛ヲ可レ知ナリ。^(勧)

(164) 面本「裏」ニ作ル

(165) 大本「夜半」ニ作ル

〔徹通和尚之註〕

夜半不^(挑カ)排^(トク)灯△却（都）絕消息^(息)去△。者也。烏投黑馬（也）△。

偈頌⁽¹⁶⁶⁾
五言八句十首也。

(89) 元々忘^(トク)朮^(ヲ)巧。大乘云、轉^(トク)色就^(ク)灰^(シ)來已得^(キ)純。ト云々。心到^(トク)玄、虛明無^(レ)間^(ク)断。〔淨

(166) 面本ニ「五言八句」ナシ

(167) 寛本・万本「已」ニ作ル

妙絕疎親^ヲ 夜半正明^(墨ケシカ) □、密戸寒灯暁。大乘云、潭底一、灵花古洞春。劫外点回一途賡^{ツキ}
ト云々。^ノ 波動、云々。^ノ 雪韻^ヲ。白馬踏^{モソ}⁽¹⁶⁸⁾ 門裡^ニ 緑苔新^ハ。那處ノ妙^ア
雪^ヲ。門裡^ニ 緑苔新^ハ。那處ノ妙^ア

〔徹通和尚之註〕

偈頌曰、兀々忘椀巧^ハ轉色就心也^ア。灰來已得純^ハ尽心到玄^ハ。位裏轉^ア。虛明無間斷^ハ夜半正明^ア。淨妙絕疎親^ハ位裏轉側然^ア。密戸寒灯暁^ハ潭底一波^ア。靈花古洞春^ハ劫外点花^ア。回途賡^ア
雪韵^ハ白馬踏^{モソ}^(雪)。門裡^ニ 緑苔新^ハ芦花生處^ア。

90 湛寂凝然透^ア。修行ノ極果^ハ。ドコマデモ透タヅ。孤明徹底空^ス_{此モ空劫ノ裏}。一位タヅ。秋風生レ古韻^ヲトハ、已前
ゾタ。明月上レ寒松^ア。トハ、日ハ出レ東天ニ、量外千差泯^ア。トハ、那邊^ア。椀前六用通^ア。
色界ニメ、六根應^レ緣成底^ス。今^ハ堂々^ア。畢竟不留^レ蹤^ア。_{融然自在^ハ。}已
ノ受用ヲ云^ハ。應^レ緣成底^ス。前ノ行履^ア。

〔徹通和尚之註〕

湛寂凝然透^ハ一句方到^ア。孤明徹底空^ハ那^(裏)妙處^ア。秋風生古韵^ハ再帶^{（月明）}。曉月上寒松
△日照在天^{（日出東天）}。量外千差泯^ハ那邊且致^ア。椀前六用通^ハ眼下見色^ハ。應緣成底^ア
△今日堂々^ア。畢竟不留^レ蹤^ハ融然自在^ア。

91 意句難分別。道断^ハ。言語^ヲ風騷格^ス外求^ム。瞎却眼睛^ハ云々。提刀空^ス四顧^ム。トハ、
截^二断^ム。無意ノ消息^ハ。提^テ刀空^ス四顧^ム。トハ、
（170） 大本「路」二作ル
（171） 大本「回」二作ル

（168） 面本・大本「裏」二作ル
（169） 寬本・面本・万本・大本「曉月」
二作ル

（170） 大本「路」二作ル
（171） 大本「回」二作ル

凡聖ヲ^ア。包⁽¹⁷²⁾丁^ス、不見^レ全牛、ト云タゾ。劫外落眼情塵脱。トハ、有無
丁ノ□様ナリ。駐^ラ歩失^レ全牛。行^(38ウ)履^スノ人ノ眼ハ、如此^ア。落眼情塵脱。ノ情塵ヲ脱
スルサカイ^ア。眼^モ飯^シ根景^シ象幽。功ヨリ位へ進ム處^ア。光落地スル^ア。眼^モ飯^シ根景^シ象幽。功ヨリ位へ進ム處^ア。
隱^ミ在異中ニナリ。万縁俱不到。トハ、劫壺空處^ア。

佛祖莫能酬。更ニ方處無^ク。ケレバ^ア。

〔徹通和尚之註〕

意句難分別^ア言語道断^ア。風騷路外求^ア眼(瞎)却眼睛^ア。提刀空回顧^ア截断凡聖^ア。駐歩失金牛
△落在那邊、隱在位中。(落在半邊)^ア。落眼情塵脱^ア於功入位^ア。飯根景象幽^ア隱在位中^ア。万
縁俱不到^ア劫空(空劫)田地^ア。(佛祖莫能酬^ア千聖不携^ア)。

〔徹通和尚之註〕

92 微⁽¹⁷³⁾澄^{ニシテ}無^レ凝碍^{レバ}、情塵^ヲ迥^{タリ}脫^{レバ}、トハ、能ク凡聖ヲ超^ヘ、
迷悟^ヲ離^{レバ}、如此^ア。全^一朮忘^カ照^外、一句未^シ分前^ノ。忘然未分^ハ、空劫タゾ。已前自己ニ契當^ス
前^ノ。然レバ、外^ハ。前^ハ。此時コソ、全朮ナレ。枯木雲^シ籠^秀。トハ、劫外^ノ寒潭月夜圓^{キル}。
是モ劫外眼^ア。回^シ頭開^レ正眼^ア、芳草破^レ春烟^ア。トハ、現成ノ芳山ガ、劫外ノ
睛ナリ。春^ト見^ヨ。春烟^ハ破^レタゾ。

〔徹通和尚之註〕(西明寺本ニナシ。岸沢文庫本ニヨル)

徹澄無礙碍^ア位高心外^ア。情塵迥脫然^ア不用今時^ア。全機忘照外^ア絕却照用^ア。一句未分前^ア混
沌一氣^ア。枯木雲籠透^ア轉位就功^ア。寒潭月夜圓^ア月明一色^ア。回頭開正眼^ア轉功出色^ア。芳艸
破春烟^ア一條活步^ア。

93 只_ト廣_{ヒロ}堆_{タマ}々_{タマ}地、常光密_{トシ}露_{トシ}眩_{トシ}。トハ、此常ガ、何ノ上ニモ堆々地_{トシ}。天外地_{トシ}外迄照タジ_{トシ}。モ同イ玄途明_{ミツメイ}絶_{トシ}朕_{トシ}。⁽¹⁷⁵⁾トハ、サテ又、何ノ妙_{トシ}躰廓忘_{トシ}依_{トシ}。トハ、空劫ニモ依ラ_{トシ}。正_{トシ}去功_{トシ}中_{トシ}点_{トシ}、傍_{トシ}來曉_{トシ}路_{トシ}阪_{トシ}。トハ、正ニ去リ、功中点トハ、去來ニ不_レ涉_スノ点シタモ、又ハ、偏_{トシ}へ阪ルトハ、却來_ス。皆是不犯ノ處アル故ニ、傍_{トシ}來ト云_ス。絲毫_{トシ}却_ス及_ス都_{トシ}、都_{トシ}及_ストハ、能凡聖ノ情ヲ尽_スサヘ_{トシ}。^(37オ)アレバ劫外ノ行履_{トシ}。此時坐ナガ_{トシ}ラ、正ニ去リ、偏來ル。兩位ノ中ニ点ル_{トシ}。口如眉トハ、不_レ用_ス言句_{トシ}。

(175) 寛本・大本「體」二作ル
(176) 寛本・大本「轉」二作ル

〔徹通和尚之註〕（西明寺本ニナシ。岸沢文庫本ニヨル。）

只_{トシ}麼堆堆地_{トシ}今時作用_{トシ}。常光密露時_{トシ}能為目前_{トシ}。玄途明絶朕_{トシ}芦花一片_{トシ}。妙體廓忘依_{トシ}天外一道_{トシ}。正去功中轉_{トシ}借位明功_{トシ}。絲毫都及盡_ス功位俱忘_{トシ}。不覺口如眉_{トシ}位裏妙容_{トシ}。

94 絶_{トシ}點純_{トシ}清処、由來是半提_{トシ}。トハ、ゲニモ真常一色ノ地ナレ_{トシ}。虛空休_ム照_ム鏡_{トシ}。向上_{トシ}打_ミ破_ミ鏡_{トシ}來_レト云_タ混_ミ沌莫_レ粧_レ眉_{トシ}。⁽¹⁷⁶⁾未_{トシ}分_スノ處ニハ、可_レ粧眉_ガ有_レ隱_{トシ}一_タ忘_レ兼_{トシ}帶_{トシ}、寥々罷_レホドニ休_タタ_ス。鏡モ入_ベカラズ。テコソ_{トシ}。曉_{トシ}杭_{トシ}。忘_シ休_タ處_ハ、阪_レ正位_{トシ}。爰_ハ、マダ空劫_{トシ}。雪消_レ寒_ム谷暖_ム、花咲_ニ不_レ萌枝_{トシ}。此二句モ、劫外ヲ云タジ_{トシ}。

〔徹通和尚之註〕（西明寺本ニナシ。岸沢文庫ニヨル。）

絶點純清處_{トシ}半邊月色_{トシ}。由來是半提_{トシ}全提如何_{トシ}。虛空休照鏡_{トシ}猶有一著_{トシ}。混沌莫粧眉_{トシ}須徹底到_{トシ}。隱隱忘兼帶_{トシ}位深_ミ處_{トシ}。寥寥罷曉機_{トシ}未曾通風_{トシ}。雪消寒谷暖_{トシ}極又通白_{トシ}。花咲

不萌枝へ劫前春色▽。

(95) 不レ犯レ清一波句、澄一江濤レ一釣。⁽¹⁷⁷⁾ 爰ノ一釣トハ、棹^ル頭風一色静、篷底夜明秋。

棹ノ動タハ、風ガ動シ、又船ニハ月ヲ乗タズ。人ハ無^レ。雁影沈レ寒水、芦花隱レ白牛。トハ、天水一色ノ秋光タズ。更ニ見別セラレヌ處^レ。須^レ

知耕⁽¹⁷⁸⁾釣外、穩密類難^{ソシ}レ收。耕釣トハ、真個ノ田夫漁人ヲ云タズ。外ト

(177) 寛本「涵」二作ル
(178) 面本・万本「棹」二作ル

(179) 万本「釣」三作ル

〔徹通和尚之註〕ナシ

(96) 路断無レ依着、空舟載レ月飯。⁽¹⁸⁰⁾ トハ、正途ニ浮タ舟タズ。ホドニコソ、載レ力窮^{テシ}忘^レ一色、功尽喪^ス全^ヲ杭^ヲ。トハ、功尽テ位ニ就タ处^レ。喪密^(39ウ)混^ル凝^ル流^ヲ處^レ、融^ニ通^ル向^レ背^レ。是モ、中流ニ舟ヲ浮テ見タ句タズ。彼岸此岸ノ波流無^レ阻、融通ソ時節ナリ。古帆風^ル静夜、任運應^ス高低。^(高ハ彼岸也)此岸^也。任運トハ、ドチヘツケウ共、併ノ手段ナリ。

(180) 寛本・万本・大本「著」二作ル

〔徹通和尚之註〕(西明寺本ニナシ。岸沢文庫本ニヨル)。

路斷無依著^ハ色盡功成▽。空舟載月帰^ハ轉功未妙▽。力窮忘一色^ハ却坐位中▽。功盡喪全機^ハ君臣合道▽。密混凝流處^ハ出頭來也▽。融通向背時^ハ彼此混然▽。古帆風靜夜^ハ人間好^ミ▽。任運應高低^ハ一片神光▽。

97 密々梭一頭、杣一絲不レ掛也。トハ、夜間ノ青女、木一鷄啼レ暁一戸、トハ、卒度ハヤ
未レ登^{ノボラ}レ杣處ナリ。木鷄デ居タゾ。石女夜生ル兒。是モ石女ノ生ノ兒ナホドニ、未⁼
ノ也太奇ニハアラズ。難レ埋ニ古一塚碑一。古塚トハ、正位也。何ノ字モ見エヌ處ヨリ、
發ル義也。入頭、最初難レ埋ニ古一塚碑一。各々ノ名ガ影シタゾ。奇特兒也。已發ニ寒一灰焰一、トハ、正位
綠、荒郊トハ冬野ノ荒タ处ヨリ、又ミルくト萌出也。風一暖^{ニノニ}共依一々。東風ガ梭ヒヲ擲テ、依々
リ、綠江ニ織出ナリ。

〔徹通和尚之註〕（西明寺本ニナシ。岸沢文庫本ニヨル）。

密密梭頭事△石女居位△。機絲不掛時△木人把印△。木鷄啼暁戸△一氣生也△。石女夜生兒△異
花一枝△。已發寒灰焰△從位出功△。難埋古塚碑△於功明位△。荒郊春艸綠△一塵出諸塵△。風
暖共依依△東西南北△

98 鳥一道通一身去、迹ノ義也。迢々劫外參。トハ、[※]元々トソレ共、日用ノ隨レ流忘^{レバ}レ^ス朕一
兆、隨^レ流トハ、一切ヲ掃イ不除ノ、癡一兀未レ曾一閑。痴々兀々トソレ共、日用ノ夏瞬^{レバ}視成レ
途一轍、トハ、途轍ニ落ヌゾ。揚一眉^{レバ}落レ二一三。痴兀迄^{レバ}。只應^シ無一見頂^{ナル}。^(40オ)子一夜白雲漫^{タリ}。

※「」ハ見セ消チ

爰ガ、却外ニ參シヤウ也。兼中到ノ行履ナ
リ。更ニ途轍ニ落ヌゾ。去社、祖^師禪ヨ。

〔徹通和尚之註〕（西明寺本ニナシ。岸沢文庫本ニヨル）。

鳥道通身去△轉色忘功△。迢々劫外參△猶帶凝然△。隨流忘朕兆△又相隨來△。癡兀未曾閑△未

出凡境▽。瞬視成途轍△直來直出▽。揚眉落二三△生下道著▽。只應無見頂△正體不藏▽。子夜白雲漫△三處共合▽。

頌古

(99) 師一日晚參。大衆圍⁽¹⁸¹⁾透法堂^ヲ一定立^ル片^一眩[。]師令^{ノテ}侍者出報^ニ云、時寒^シ、各請飯堂^{セヨ}。トハ、飯^{セシムル}位ノ義ナリ。正[。]大衆久而不散[。]ハ、守^ル偏位^ニ。師遂^テ出拋⁽¹⁸³⁾座^ル片^一時[。]飯堂^{セヨ}ノ故ナリ。ト云意氣[。]バ。不妨正位[。]大衆定立[。]望[。]元^{モト}ヨリ散ゼザ師起[。]身便飯方丈[。]早竟[。]正中^ノ有⁽¹⁸⁴⁾頌云、寒[。]明[。]一点墮⁽¹⁸⁵⁾空[。]林[。]々々ハ正位[。]大乘云、錯⁽¹⁸⁶⁾テ不用^レ墮^レ空林ニ云々。朕兆依[。]已觸[。]今^ニ云々。目擊正容成[。]滲漏[。]云、錯[。]不^レ用^レ成[。]青天白日轉迷[。]人[。]錯[。]不^レ用^レ迷[。]人[。]早竟如何[。]錯[。]不^レ用^レ迷[。]人[。]早

(181) 寛本・万本「達」二作ル
(182) 寛本・面本・万本「出」ナシ
(183) 寛本・面本・万本「座」ニ作ル
(184) 面本「示」ニ作ル。マタ寛本・万本ニ「有」ナシ
(185) 寛本・万本ニ「林」ナシ
(186) 寛本・万本ニ「朕」ナシ

〔徹通和尚之註〕

頌云、寒明一点墮空林△錯不用墮雲（空）林△。朕兆依稀已觸今△錯不用已觸今△。目擊正容成滲漏△錯不用成滲漏△。青天白日轉迷人△錯不用轉迷人。畢竟如何。錯々瑕生△。頌一列極難見也。須實參△。

(100) 有[。]眩示^レ眾云、尽^一大^一地[。]是⁽¹⁸⁷⁾个[。]熱[。]鐵⁽¹⁸⁸⁾丸[。]下^ニ得[。]口[。]也通[。]身紅爛[。]下^レ口不^レ得也通[。]身紅爛[。]如[。]何免[。]ニ[。]可[。]得此[。]過[。]トハ、早竟何共触[。]着[。]有⁽¹⁸⁹⁾頌云、乾[。]坤[。]那[。]畔[。]類[。]難[。]齊[。]大乘云、硬[。]如[。]鐵[。]云々。此那一物^ハ、如[。]此[。]ナゾ。千聖從[。]来不^レ識[。]伊[。]無^ミ人^識得伊[。]又云、家[。]破人[。]亡[。]迷[。]肯[。]

(187) 寛本・面本・万本ニ「箇」作ル
(188) 万本「鐵」ニ作ル
(189) 面本「示」ニ作ル・マタ寛本・万本ニ「有」ナシ
(190) 大本「濟」ニ作ル
(191) 面本「忘」ニ作ル

重、^ニ不還^ミ這^ニ路。夜^一深寒^一塔影空^ニ垂^ル。到得玄妙極位、却^一轉ス。妙中辺差^ニ路也。之回互^ニ。未曾墮^ニ偏正方^ニ云々。

〔徹通和尚之註〕

乾坤那畔類難濟^ハ硬如鍤[▽]。千聖從來不識伊^ハ無人識得伊、不諸聖行履處也[▽]。家破人忘迷肯重^ハ不還者邊差路也[▽]。夜深寒塔影空垂^ハ明到玄妙極位、却^一轉、妙中之回互、未曾墮偏正方[▽]。

(101) 有^一貯問^レ僧、命^一根不^レ断^{レハ}、不^レ到^レ牢閑^ニ。命^一根断^レ后[、]向^ニ什广処^ニ去[。]僧無^一語。

牢閑トハ、地獄門タゾ。去社[、]命根不^レ断^ハ到ヌゾ。洛浦示众云、末后一句、始到^レ牢閑。把^レ断要津[、]不^レ通^レ凡聖、ト云タ程ニ、凡人モ聖人モ、難^レ透關タゾ。向什广処去トハ、自己ノ渾源[。]什广処、^{々々々}落着ハ無ゾ。¹⁹² 頌云。万^一縁歇^一尽照^一無時[、]大乘云、知^レ尽功^一忘シ去[。]撒^レ手忘^レ僧無^一語ガ、面白ゾ。頌云。万^一縁歇^一尽照^一無時[、]休歇シヤウガ、肝要タゾ。撒^レ手忘^レ依^ヲ有^レ路版^ル。¹⁹³ 路分云々。劫外^ニ一壺春色暖[。]枯木花開云々、¹⁹² 灵苗石上正芳菲。是モ、¹⁹³ 劫外ノ景色ナホドニ、石上ニ盛[。]触^レ途不^レ涉^レ縁[。]大乘良久云。夜明^一主[、]不^レ墮^ニ偏正方^ニ、云々。

〔徹通和尚之註〕

万緣歇尽照無時^ハ知尽功忘[▽]。撒手忌依有路版^ハ妙極而線路分[▽]。劫外一壺春色暖^ハ枯木開花[▽]。靈苗石上正芳菲^ハ回途中芋々。畢竟不涉去留相。又如何。良久曰、夜明簾外主、不墮偏正方[▽]。

(102) 僧問。如「何是」^レ空「劫已」前^レ。師云、白馬入^レ蘆花[。]トハ、一色明邊ノ義[。]空劫トハ、無明⁽⁴¹⁾オ^レ極。

闇ノ處^ト。况ヤ己ノ更^ヲ問タゾ。更ニ難レ。⁽¹⁹⁴⁾ 頌云、線道難^レ分處、トハ、白馬ト芦花ト一色ニメ、云處^ト。答ハ、回互ノ杭ト可^レ見ナリ。須レ^シ知不^レ是伊。トハ、伊ハ已前ノ自己ヲ云^ト。牛^{一頭}⁽¹⁹⁵⁾按^レ尾上^ト。トハ、線道難^レ分處、正當夜半^ト。豈レ^シ借^シ大陽輝^ヲ。トハ、空^{〔劫已〕}前^ト。一方へ落居セヌ一位^ト。不犯ノ一處共、此ヲ云タゾ。大乘云、牽^ニ轉牛鼻、欲耕破劫空田地來^ト。位裡之轉倒^{〔側カ〕}ハ、已ニ分^レ線路^ヲ。是空^{〔劫已〕}前ノ更也。又、是回互也、云々。

〔徹通和尚之註〕

線道難分處、須知不是伊^ハ君臣合道^ヲ、教誰知^ハ。牛頭安尾上、豈借大陽輝^ハ牽轉牛鼻欲耕破劫空田地來。位裏也。云轉側。已分線路、是空劫已前更。又是回互ナリ。

(103) 宣和癸卯、宴坐自讚。三十六年作^ス怪^{ケラ}。トハ、サテ何物力、如此世^ニ出生メ、撞^ク入者⁽¹⁹⁶⁾。是モ真歇^ニ不^レ限、一切^ヲ。一千七百衲^僧、被^ニ你熱^ニ瞞^{ハナ}⁽¹⁹⁷⁾惑^ニ煞^ト。理ハ、傳^ハ。又入^シ聖^{スル}。奇怪ナ更^{タゾ}。灯ノ祖^モ如^ニ今坐^ニ断舌頭^ヲ、トハ、言語道断^ノ時^ト直^ニ下大千俱壞^ニ。我ト大千ハ、ツレ物^{タソ}。知^{ヌゾ}。如^ニ今坐^ニ断舌頭^ヲ、節^{一息}切^ニ断^ハ。直^ニ下大千俱壞^ニ。我ト大千ハ、ツレ物^{タソ}。劫^外迢々^キ曉未^レ崩^ト。莫^ニ把^レ虛^ニ空粧^ヲ。五彩^ヲ。トハ、師^ノ全体ハ、無面目^有。五色ノ丹青ハ、用^ニ立^{ヌゾ}。

〔徹通和尚之註〕 ナシ

(194) 面本「示」ニ作ル
(195) 大本「安」ニ作ル
難^レ弁別處ヲ云タゾ。此ガ、

寛本・面本・万本「箇」ニ作ル
(196) 寛本・面本・万本「箇」ニ作ル
(197) 万本「殺」ニ作ル

面本「明」ニ作ル
(198) 面本「休」ニ作ル

面本「休」ニ作ル

(104) 塔銘曰、是ハ、天童覺和佛祖之燈、東西繩々。トハ、過去ノ燃灯仏ヨリ以来、西天・⁽²⁰⁰⁾
ギ。以レ悟為則、惟證相應。悟心傳レ心タゾ。サ花自發、覺海元澄。我ニ無イ
來ノデハ無ゾ。自發タ⁽²⁰¹⁾蹴踏龍象、變化鯤鵬。トハ、出世大乘ノ根器ノ人ヲ云。雪庭之可、⁽²⁰²⁾卷屋之能。
花、元ヨリ澄タ海タゾ。テコソ、相應ヨ。

皆是劫外ノ花ヲ持シ、覺無⁽²⁰³⁾三絲繫⁽²⁰⁴⁾蠻、無⁽²⁰⁵⁾三繆聚⁽²⁰⁶⁾蠅。トハ、肚裡ニ一星戛ナク、内⁽²⁰⁷⁾菩提印々、
海ヲ令⁽²⁰⁸⁾澄タ人タゾ。外玲瓈タルヲ、云⁽²⁰⁹⁾貧處⁽²¹⁰⁾。

般若乘々。トハ、的々菩提ヲ以テ菩提ヲ印シ、以レ般若乘般若タゾ。月挑⁽²¹¹⁾夜⁽²¹²⁾色、山拭⁽²¹³⁾秋⁽²¹⁴⁾稜。トハ、潔白ニメ、秋山⁽²¹⁵⁾・秋月ノ陰モ無キ如⁽²¹⁶⁾。

宗傳⁽²¹⁷⁾曹洞、⁽²¹⁸⁾濟深凝重。トハ、回互傍參⁽²¹⁹⁾、敲唱双行、⁽²²⁰⁾正偏互用。家風細密ナルヲ云。

敲唱ノ義豹⁽²²¹⁾、變霧⁽²²²⁾披、龍驤⁽²²³⁾雷送。豹ハ、陽ノ精也。龍ハ、陰ノ精ナル故ナリ。而⁽²²⁴⁾此⁽²²⁵⁾、陰陽推移様子ヲ云タゾ。

梭、極位正當ガ、梭臍タゾ。此明窺⁽²²⁶⁾錦縫。トハ、文彩アザヤ法々本然、門人⁽²²⁷⁾變弄。トハ、二句共ニ、杣回⁽²²⁸⁾ニ⁽²²⁹⁾ヨリ黒絲モ白絲モ吐出⁽²³⁰⁾。此明窺⁽²³¹⁾錦縫。カニ織リ出タゾ。暗擲⁽²³²⁾レ金⁽²³³⁾トハ、付法ノ偈ワ、何モ本法⁽²³⁴⁾ハ無⁽²³⁵⁾影悟⁽²³⁶⁾レ蛇疑、物齊⁽²³⁷⁾蝶夢。二句共ニ、故事アリ。晋ノ法ト云タゾ。此ヲ種々二唱弄シ来タゾ。

蝴蝶ト成テ、入南華義也。何道詣而唱、心聞而賞。道ハ、已前ヲ云タゾ。此ヨリ咄出タゾ。モ妄想⁽²³⁸⁾。痕無⁽²³⁹⁾キ義ナリ。

ゾ。力回⁽²⁴⁰⁾万丈、杏齶⁽²⁴¹⁾一掌。是モ、二句共ニ故吏アリ。上ノ句ハ、杣變人ニ勝タルヲ云。丹山⁽²⁴²⁾・⁽²⁴³⁾下ノ句ハ、情ノ深ヲ云。二共、師ヲ比シホメタゾ。丹山⁽²⁴⁴⁾・⁽²⁴⁵⁾師威勢ノ云。下ノ葦江東⁽²⁴⁶⁾趨⁽²⁴⁷⁾、雪峰南仰。長炉ノ流ノ長ヲ云。惠⁽²⁴⁸⁾玉線金鍼、鰐釣⁽²⁴⁹⁾句ワ、師ノ威光也。

夙⁽²⁵⁰⁾、金針⁽²⁵¹⁾為⁽²⁵²⁾網打⁽²⁵³⁾鳳⁽²⁵⁴⁾、妙觸⁽²⁵⁵⁾根塵、冲融⁽²⁵⁶⁾影響。体用ヲ弄メ、其風雨江湖烟⁽²⁵⁷⁾。

(200) 面本ニ「日」ナシ、又銘文ノ前ニ「崇光真歇了禪師塔銘」トシテ「序」(略伝)ヲ載セル

(201) 面本「華」ニ作ル

(202) 面本「踏」ニ作ル

(203) 面本「春」ニ作ル

(204) 面本「排」ニ作ル

(205) 万本「灘」ニ作ル

(206) 面本「象成」ニ作ル

(207) 面本「門」ニ作ル

(208) 面本「夫」ニ作ル

(209) 面本「香」ニ作ル

(210) 面本「沂」ニ作ル

(211) 面本「展」ニ作ル

(212) 面本「翻」ニ作ル

(213) 面本「趣」ニ作ル

(214) 面本「虐」ニ作ル

(215) 面本「五」ニ作ル

簾⁽²¹⁵⁾一槳。トハ、呂望力更^ハ。渭理之所^レ飯、水之移^レ低。トハ、師ノ理ハツニ
 出^レ手提^ヲ携。餘^{一等ニ接タゾ}。凡聖共ニ、不^レ石虎風^ニ嘯^キ、木鷄夜^ニ啼^{タビリ}⁽²¹⁶⁾。トハ、無心ノ作用ヲ云^ハ。輸^レ心授^レ引^シ
 銀絹[□]玉ウ^ハ。天子ヨリ五タビ^{六祖タゾ}。孤^ニ岐^月擇²²⁰、双^ニ徑^雲梯²²¹。七拠^レ縕^海、五承^レ紫^泥。トハ、七處ニ
 接^レ曹^一溪^ニ。比^レ達^广、譬^レ花^滋釀^レ蜜^{カモシヲ}、挂^レ魄^通犀^ス。花^ハ陽[、]月^ハ陰[。]双^ニ徑^ハ、偏正^ノ兩^ニ。不^レ欠^ハ。門連^レ少^室、路²²²。
 三昧塵々。平生ノ作業^{如レ此ナリ}。象王之歩、師子之囁²²⁴。野干ノ路ラフマス、又、母陀羅臂、舜²²⁶。野干ノ鳴ヲナサヌゾ。野干ノ路ラフマス、又、母陀羅臂、舜²²⁶。
 若多身。上ノ句ハ、用ル時通ト云タゾ。星圖^レ魁斗^{クイトラ}、花兼^レ春^ニ陽[。]生ノ間、師ノ第二見ニ落^一。下ノ句ハ、無レ身覺^レ触ト云^ハ。肝^モ銘^シ、神^ヲ驚^ハ。正因非^ス字、絕^ニ學^ニ為^レ憐[。]正因モ²²⁸。文字ヲ不^レ立^ハ、習^{ラス}。步轉^レ空^ニ劫^ニ、舟膠^レ要^ニ津[。]トハ、何ニモ滯在セヌ義^ハ。未モ、真^ニ灯不^ニ夜[。]テ²³⁰。嗣^レ光^有神^ヲ。過去燃灯仏ノ一灯ハ、師ニ至テ、²³⁰。光^ヲ増タゾ。能ク挑起^{タト}云^ハ。〔43才〕

〔徹通和尚之註〕 ナシ

長蘆⁽²³¹⁾寂庵真歇了和尚劫外之錄終

(231) 面本八尾題「劫外錄尾」二作ル、又「付錄」七篇ヲ付ス

于貳元龜貳天辛未初秋下瀚吉辰印道号

悅翁下之僧玄龍寬永十九極月 小高常光院冬之江湖衆寮ニテ書写之早

〔徹通和尚之註〕

寂庵和尚語錄大乘開山註終 △皆文正二年七月日、於如意院書之是早▽